

キャリアデザイン構築プロセスの探索的研究

学籍番号 12022041

宮崎陽平

指導教員

立木茂雄

目次

はじめに ...3

1 定義

1.1 キャリアデザインとは ...3-4

1.2 大卒離職率3年3割 ...4

2 分析の枠組み

2.1 目的 ...4-5

2.2 調査対象と調査方法 ...5

2.3 調査内容 ...5-6

2.4 モデル化の試み ...6-9

3 各ケースの結果とモデル化

3.1 Aくん ...9-13

3.2 Bくん ...13-17

3.3 Cくん ...17-23

3.4 Dくん ...23-29

3.5 Eさん ...29-36

3.6 Fさん ...36-44

3.7 self reflection ...45-49

4 全体の結果と考察

4.1 現実自己と現実状況の相互作用による理想自己の推移 ...49-52

4.2 理想自己の変化の要因 ...52-54

4.3 大卒離職率との因果関係 ...54

おわりに ...54

注・文献

はじめに

私は、就職活動を苦勞したけれども、就職活動をやってよかったと思えることが多くある。それは、様々な視点から自分というものを見るための助力になったこと、社会というものに触れ合うきっかけになったこと、成果達成の行動特性であるコンピテンシーの増長、自己受容などがあげられる。つまり、私は就職活動によって様々なことで良い点を感じていた。しかし、既に就職し、企業で働いている友人にあったとき、その友人は会社を辞めると言った。苦勞して就職したにも関わらずおよそ半年で辞めると言ったのである。それは、自分のしたいことがあることが他にあるからだと言った。この企業では自分のなりたい自分にはなれないと言う。しかし、それは未然には防げなかったのだろうか。入社するまでにできることがあるのではないだろうかと思感じた。

昨今、キャリアデザインという言葉がよく聞かれるようになった。また、あちらこちらでキャリアデザインスクール、はたまた、キャリアデザイン学科というものが存在するようになった。逆に考えれば、それは働く人のキャリアデザインというものの行い方に疑問を呈するものであると思思う。

そして、私自身、友人の言動から学生時代の就職活動期におけるキャリアデザインがうまく行われていないのではないかと疑問に思った。そして、不適切なキャリアデザインが、昨今問題になっている若者、とりわけ大卒の離職率3年3割という問題の一因をかつているのではないかと考えに至った。つまり、私は、就職活動期のキャリアデザインを研究することによって、その問題の糸口をつかめると考えた。

1 定義

1.1 キャリアデザインとは

キャリアデザインとは、「個人の現在から将来のキャリア生活において、満足感、納得感を高めるために、現実と自己概念の統合を図り、自分なりのシナリオに落とししていく作業」（古野 1999: 6）である。この概念を初めて導入したのは、D. E. スーパー（1957）であり、彼は自己概念が青年期に明確化するとし、それは現実吟味を通して興味、価値、能力が統合されつつ職業的意味への翻訳がなされるとした。また、足立（1990）は、自己概念が職業的用語に翻訳して得られるものを、「職業的自己概念」として、この「職業的自己概

念」を実際に実現していくことが「職業的自己実現」であり、つまり、「今の自分＝現実の自己がなりたい自分（＝理想自己）＝理想の自己になること」であると定義した。

しかしながら、このように理想自己が個人の価値と方向性を示すものであったとしても、現実の職業経験を持たない学生が抱く理想自己はまだ漠然としていて、現実から遊離したものである可能性が高いと梅村・金井（2004）は考えた。つまり、「こうなりたい」という姿を、そのまま単純に職業に結びつけるのではなく、「学生時における理想自己が、今の自分（＝現実自己¹⁾）とあなたが実際におかれていた社会状況、例えば経済状況や雇用情勢（＝現実状況²⁾）という2つのギャップの認知、対処、統合で明確化されるとした。

1.2 大卒離職率3年3割

昨今、大学を卒業して3年以内に離職をする人が3割いるということが問題視されている。中でも、第二新卒と呼ばれる20から24歳の人々は22.36%が自発的に離職しているということがわかっている（阿部 2005）。つまり、半数以上の大卒者は自発的に離職することがわかる。その問題の原因として、ひとつに労働力の高学歴化が挙げられる。採用側の企業の本音として、本来は高卒者で間に合っていた職務に対して、大学進学率の上昇から、高卒で優秀な人が採用しにくくなったがゆえに、やむを得ず大卒を採用しているという指摘がなされている。その結果として、データは古くなるが、総合研究開発機構の調査によれば、1965年から1975年にかけて増加した大学卒業生332万人のうち、約3分の1は、経済成長に伴う大卒向け職務の増大によって吸収されたが、残りの約3分の2は以前は高卒ないしは中卒向けであった職務で吸収されたことがあきらかになっており（笹島 2002）、仕事のやりがいの面での不満から仕事を辞めていく人が多いことが示唆されている。

2 分析の枠組み

2.1 目的

これまで、大学生の就職活動については多くの研究がなされてきた。梅村・金井（2004）は理想自己と現実自己及び現実状況のギャップの認知、対処、統合によって、理想自己が明確化されるとした。また、学生は就職活動を通して自己受容度、コンピテンスともに大きな伸び率が認められた（岡村・玉野・山中・三嶋 1998）り、ありのままの自分を出せるように変化する（＝アイデンティティの統合）（高村和代 1995）ことから、学生は就職活

動により、現実自己と現実状況を理想自己と照らし合わせ、統合させようとそれぞれ変化させているといえる。

しかし、これらの研究では就職活動におけるポジティブな面は見えても、ネガティブな面は見えないと考える。私は就職活動のあり方を把握するためにネガティブな面も考察することが必要であると考え、内定を取るための就職活動をすることにより、自分の理想をねじ曲げたり、社会を絶対的なものとして捉え、自分を卑下するようになったりするのではないだろうか。

また、就職活動を終わってすぐは、達成感や個人の事情などにより、理想自己について考えることは少ないが、時間が経つにつれ、また就職してからのギャップにより理想自己と現実自己及び現実状況の統合について再検討されると思われる。

そこで、梅村・金井の研究に付け加えて、現実自己と現実状況のギャップの認知、対処、統合を検討することにより、理想自己と現実自己と現実状況の3つのバランス、もしくはその3つ以外の理想自己に与える要因について考察する。そして、理想自己がどのように推移していくのかを検討し、その裏側にある要因を考察することにより、キャリアデザインのあり方と大卒者の入社3年以内の離職との関係を明らかにしたい。

2.2 調査対象と調査方法

調査対象として、立木ゼミ受講者の就職活動を始めようとしている3年生、就職活動を終了した4年生、社会人からそれぞれ男性2人ずつ選んだ。性差を避けるために調査対象を男性のみに限った。また、昨今仕事の在り方が多様化しているが、この研究では仕事をwantではなくmustと考えるものに限定した。調査方法は1対1の半構造化面接を行い、面接の所要時間は平均30分であった。

2.3 調査内容

調査内容は、以下のとおりである。就職活動初期に理想自己(「こんな仕事がしたい」「仕事においてこういう風になりたい」)を持っていた(持っている)か。持っていた(持っている)としたら、それはどういったものだった(どういものである)か。現実自己(「今の自分(本当の自分)」)について吟味した(吟味している)か。現実状況(「あなたが実際におかれていた社会状況、例えば経済状況や雇用情勢」)について吟味した(吟味している)か。理想自己が明確化した(している)か。就職活動において理想自己を

実現するに当たって、現実自己との間でギャップを感じた（感じている）か。感じた（感じている）時には、どのように対処した（対処しようとしている）か。現在はどうか。就職活動において理想自己を実現するに当たって、現実状況との間でギャップを感じた（感じている）か。感じた（感じている）時にどのように対処した（対処しようとしている）か。現在はどうか。就職活動において現実自己と現実状況にギャップを感じたか。ギャップを感じたとき、どのように対処したか。現在はどうか。理想自己を実現するために、現実自己と現実状況のどちらかを優先したか。優先したとしたら、どちらを優先したか。理想自己の実現にあたり、現実自己と現実状況以外に影響を与えたものがあるか。それは何か。

2.4 モデル化の試み

私はこの研究で用いるモデルを図1のように作成した。それぞれに調査項目をあてはめ、それらをモデル化することによって、キャリアデザインプロセスを可視できる形に表す。そうすることにより、私はキャリアデザインプロセスの特徴がより見えてくると考える。また、キャリアデザインのプロセスに伴って理想自己がどのように変化するのが、よりわかると思われる。そして、理想自己が個人の最終的な目標になるので、理想自己が現実自己と現実状況からどのように影響を受けているのかを考察することにより、キャリアデザインの傾向がわかると考える。

そのように、調査対象をそれぞれケースごとに個別にモデル化し、検討することにより、キャリアデザインプロセスの特徴がより浮き彫りになると考える。

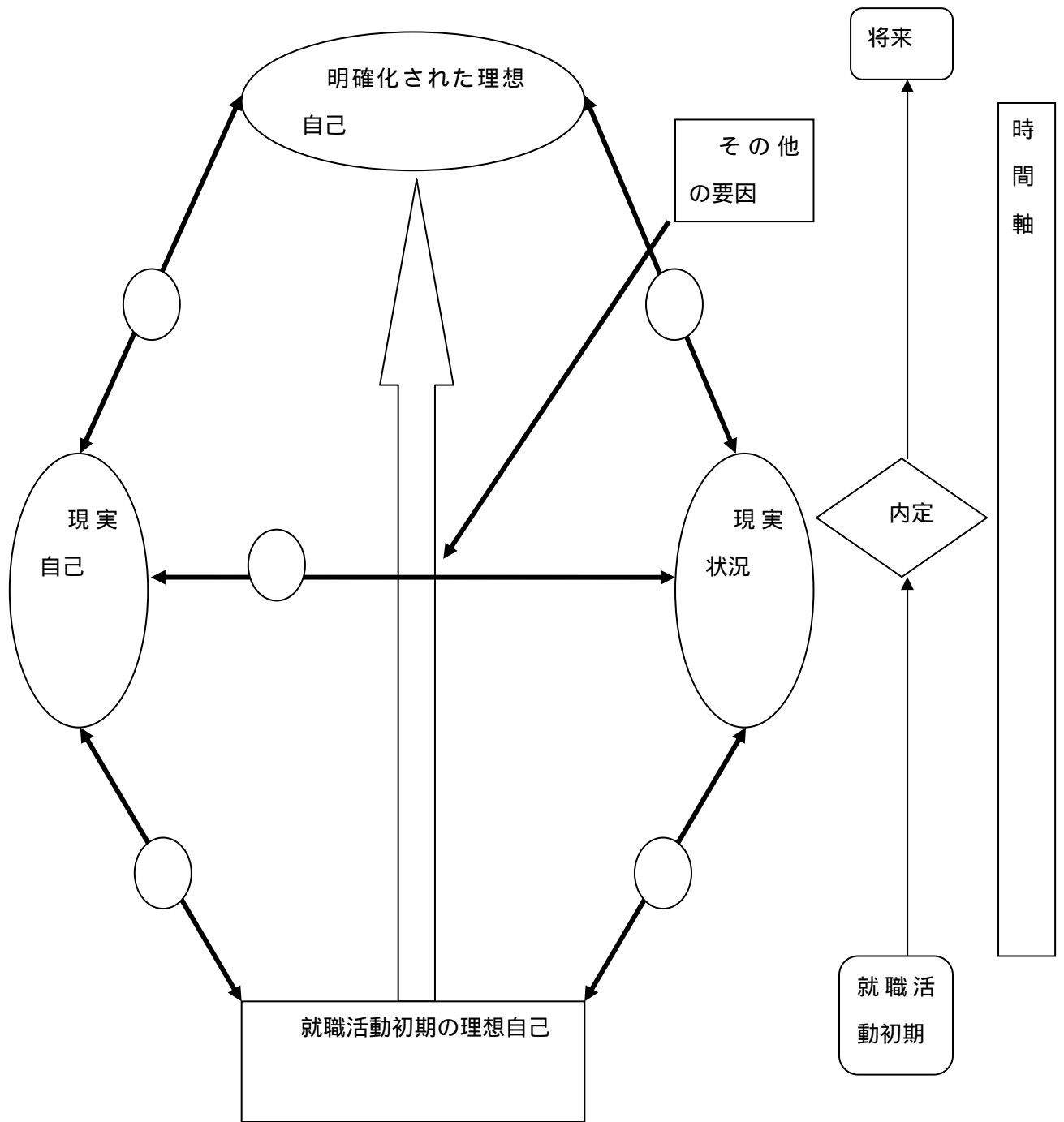


図1 キャリアデザイン構築プロセスモデル

この図に見方について以下9つの項目について説明しておく。まず、図1中の のは調査項目 の就職活動初期に理想自己(「こんな仕事がしたい」「仕事においてこういう風になりたい」)を持っていた(持っている)か。持っていた(持っている)としたら、それ

はどういったものだった(どういうものである)かという調査内容に対応する。次に、図1中の は調査項目 の現実自己(「今の自分(本当の自分)」)について吟味した(吟味している)かという調査内容に対応し、その大きさは理想自己に与える相対的な吟味の度合いを表す。第3に、図1中の は調査項目 の現実状況(「あなたが実際におかれていた社会状況、例えば経済状況や雇用情勢」)について吟味した(吟味している)かという調査内容に対応し、その大きさは理想自己に与える相対的な吟味の度合いを表す。第4に、図1中の は調査項目 の理想自己が明確化した(している)かという調査内容に対応する。第5に、図1中の は調査項目 の就職活動において理想自己を実現するに当たって、現実自己との間でギャップを感じた(感じている)か。感じた(感じている)時には、どのように対処した(対処しようとしている)か。現在はどうかという調査内容に対応し、その太さは相対的な影響力の大きさを表し、矢印の方向は優先する方向を表す。また、→ はすでに起こったこと及び実行したことを表し、→ はまだ起こっていないこと及び実行していないことを表す。第6に、図1中の は調査内容 の就職活動において理想自己を実現するに当たって、現実状況との間でギャップを感じた(感じている)か。感じた(感じている)時にどのように対処した(対処しようとしている)か。現在はどうかという調査内容に対応し、その太さは相対的な影響力の大きさを表し、矢印の方向は優先する方向を表す。また、→ はすでに起こったこと及び実行したことを表し、→ はまだ起こっていないこと及び実行していないことを表す。第7に、図1中の は調査項目 の就職活動において現実自己と現実状況にギャップを感じたか。ギャップを感じたとき、どのように対処したか。現在はどうかという調査内容に対応し、その太さは相対的な影響力の大きさを表し、矢印の方向は優先する方向を表す。また、→ はすでに起こったこと及び実行したことを表し、→ はまだ起こっていないこと及び実行していないことを表す。第8に、図1中の は調査項目 の理想自己の実現にあたり、現実自己と現実状況以外に影響を与えたものがあるか。それは何かという調査内容に対応し、その太さは相対的な影響力の大きさを表す。第9に、時間の流れは図1中の 就職活動初期から の明確化された理想自己に向かって推移しており、真ん中より の就職活動初期の方が就職活動期、真ん中より の明確化された理想自己の方が内定後及び将来を表す。

これらを要約すると、理想自己は、時間軸のある一点を抽出したときに、現実自己と現実状況、そしてその他の要因によって定められるものである。このモデルにおいては時間軸を縦にとり、ブロック矢印はキャリアデザインのプロセスを表す。矢印は二つの概念間

のどちらを優先するのかを表し、太さは影響力を表す。つまり、どちらが目的となっているかを表すものであり、矢印が向かっている方が目的である。例えば、現実自己から理想自己に太い矢印が向かっているような場合は、理想自己が現実自己に優先し、その影響力が強いということになる。現実自己及び現実状況の大きさに関しては、どれだけ吟味されているかによって大きさが定められる。例えば、現実自己が大きく現実状況が小さければ、現実自己はよく吟味されているが、現実状況はあまり吟味されていないということになる。

このようにしてできたモデルは就職活動を始めたときの理想自己が、現段階における将来こうなりたいと描いている理想自己になるプロセスにおいて、現実自己と現実状況の影響をどのように受けているかを表している。

3 各ケースの結果とモデル化

3.1 Aくん

Aくんは真面目で堅実そうな印象を受ける大学3年生である。話し好きというよりかは聞き上手といったタイプのAくんはこれから就職活動を行う予定である。

(1) 就職活動初期の理想自己

Aくんは調査内容 の就職活動初期の理想自己について以下のように語った。

文字を通じて何か主張することとか好きやし、あとは、薬とか、物流とか。物を運んだりすることが好きなんですよ。物の移動とか。あとは、本を出したいってのもありますし。

業種で言ったら、新聞、マスコミ。

Aくんの理想自己はまだ現実状況の干渉は受けていないが、文字を通じて主張することが好きという現実自己からマスコミに行きたいという志向があることがわかった。これは、現実自己の影響を強く受け、理想自己が出来ているといえる。

(2) 現実自己の吟味

調査内容 の現実自己の吟味について A くんは以下のように語る。

やりがいと貢献ですかね。正直僕は、そんなにお金はいららないんですよ。あの、仕事に何を求めるかかって、ま、一千万二千万、一億とか、全然いららないし。ま、安いのは困りますけど。別に高くなくてもいいんで、やってやりがいのある仕事がしたいです。

A くんは現実自己は理想自己と密接に関連している印象を受けた。だが、金額の単位に現実味がなく、現実状況の吟味が行われていないといえる。

(3) 現実状況の吟味

調査内容 の現実状況の吟味について A くんは以下のように語る。

内定をもらえる人と、もらえない人の差は広がってきて、で、もらえる人は5個も6個ももらえるけど、もらえない人はせいぜい1つか2つくらい。全然もらえない人も中にはいるって聞いて、バブルの時は学歴だけで、誰でもいいから取ったっていう時代があったけども、今はそうじゃないっていうふうに聞いて、やっぱりそれなりの対策とか必要だろうと思うし。

A くんは現実状況について漠然と知識はあるが、吟味はまだ行っていないといえる。しかしながら、現実状況を吟味しなければならないという姿勢は伺えた。

(4) 理想自己と現実自己のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実自己とのギャップの認知と対処について A くんは以下のように語る。

いやもう、ほんとたくさんあるんですけど、やっぱり世間知らずやなあっていうのがまず最初に思い浮かぶことで、世の中のことをもっと知らないといけないなって。知識面でもそうですし、礼儀とか、その、付き合いとか、そういうのをまったく知らない状態で。そういうのはもっと勉強していかないといけないと思うし。仕事の具体

的な技術面とかでも，心配はしてますけど，ま，やっぱりそこですね．

やっぱり勉強するしかないでしょうね．

A くんは理想自己と現実自己とのギャップを知識不足という点で感じていることがわかる．そして，そのギャップを勉強して知識を得ることで対処していこうとしていることがわかった．つまり，理想自己が現実自己に優先していることがわかる．

(5) 理想自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実状況とのギャップの認知と対処についてAくんは以下のように語る．

僕が行きたいところは，第一志望はマスコミなんで，新聞と出版なんで，ものすごい激務やってのを聞いてるんですよ．7時に起きて，8時か9時には出勤して，仕事が終わるのが1時とか2時とかで，もう休憩もほとんどなくて，次から次に猛烈に仕事をこなしていかないといけないっていうふうに分かんなくて，やはりその自分の性格を考えたときに，すごいギャップはありますよ．あるけど，でも，それを埋めていく努力は必要やと思うし，完全にそういう違う自分にならなくてもいいとは思んですけど．

ギャップは感じてるんだけども，そこまで業界に合わせたいって思わないのが本音．自分勝手な意見なんですよ．

A くんは自分の知っている現実状況の範囲で，理想自己と現実状況のギャップを性格という点で感じていた．対処としては，ギャップを感じながらも，自分の理想を尊重し，社会に合せたくないと思っていることがわかる．現実状況を理想自己に合わせて行こうとする姿勢が伺える．つまり，理想自己が現実状況に優先することがいえる．

(6) 現実自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の現実自己と現実状況のギャップの認知と対処についてAくんは以下のように述べる．

努力さえすれば入れるもんやと .自分の夢は叶えられるというか .大学入るまでは ,勉強さえしてたら ,これをやったら正解やってのがあって ,勉強して大学に入ったわけじゃないですか .就職ってというのはたぶんそれが無いじゃないですか .こうすれば正解ってのがなくて ,でもまだ自分の中では ,勉強をがんばったら新聞しっかり読んだら入れるような気になってしまってるところがある .

A くんは現実状況を知ることにより ,現実自己の再編が求められている時期にいるということがわかった .つまり ,今現実自己と現実状況の吟味の過程にいることが明らかになった .だが ,現段階では現実自己が現実状況に優先していることがわかった .

(7) モデル化

以上のことをモデル化する図2のようになる .

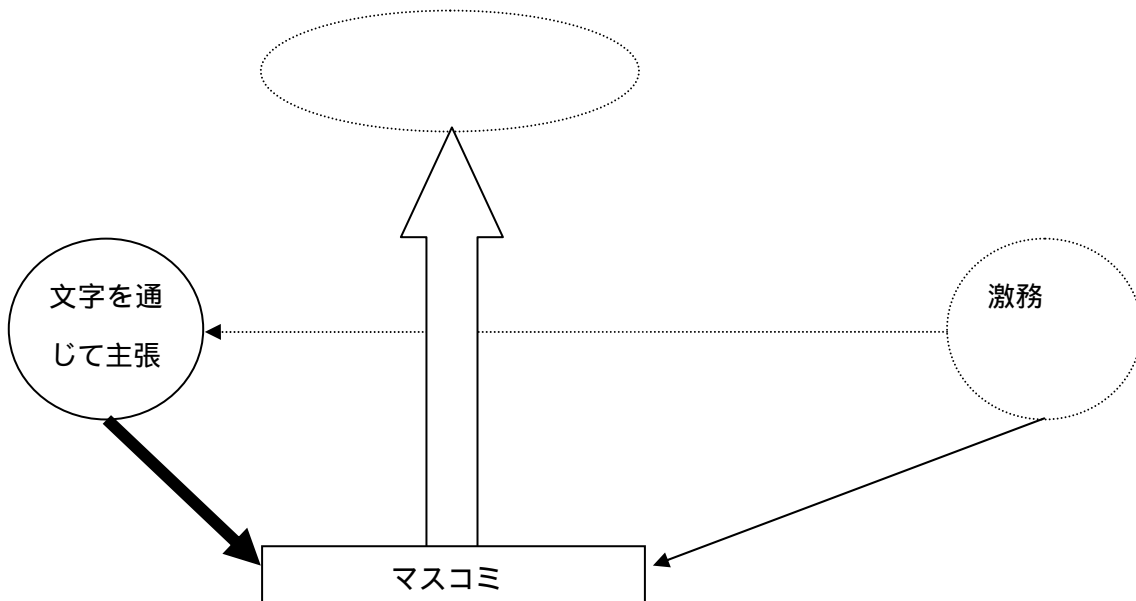


図2 A くんのカリヤデザイン構築プロセスモデル

A くんは理想自己は就職活動初期ということもあり ,将来の理想自己は未定であるから ,点線である .現実自己の大きさは(2)で一千万二千万 ,一億とか ,というようにお金の単位に現実味がなく ,あまり吟味されていないので ,小さく ,現実状況も(3)で見たように

もらえる一般的な内定の数といったような漠然とした就職活動についての知識があるくらいなので小さい。そして、現実状況に関しては、まだ就職活動を始める前なので、実際に現実状況に触れていないということから、実を伴っていないので点線である。また、就職活動初期の理想自己が現実自己により近いのは、(1)で、文字を通じて主張したいからマスコミとあるように、相対的に見て現実自己の方が現実状況よりも大きく影響しているからである。現実自己と理想自己間を説明すると、文字を通じて何かを主張したいという現実自己がマスコミで働きたいという理想自己の形成に相対的に大きな影響を与えていることから現実自己と理想自己の矢印は太く、また(4)で見たように、理想自己に現実自己を合わせていくために勉強しようとしているといったように、理想自己が現実自己に優先することから、矢印は理想自己に向かっている。現実状況と理想自己間を説明すると、マスコミは激務という知識はあるが、それは相対的にはあまり理想自己には影響を与えていないので矢印は細く、(5)でギャップを感じても本音としては業界に合わせたくないというように、理想自己が現実状況に優先することから矢印は理想自己に向かっている。現実自己と現実状況間について説明すると、(6)で努力さえすれば企業に入れると思っていることから現実自己は現実状況に優先するので、矢印は現実自己に向かうが、まだ行動を移していないから、点線になる。

3.2 Bくん

Bくんはマイペースであまり人の干渉を受けない印象を受ける大学3年生である。努力家でやるときはやるといったタイプのBくんはまだ就職活動はやっていないが、これから行う予定である。

(1) 就職活動初期理想自己

Bくんは調査内容 の就職活動初期の理想自己について以下のように語った。

けっこうな稼ぎは欲しい。希望するならばの話。

なーんか、作るのがいいなあ。例えばコンピューターでそれこそ、ソフト作ったり、とか、そういうのができる人はすごくいいと思う。手に職かんあるし。

B さんの理想自己はまだ吟味は行われておらず、現実状況の干渉はほとんど受けていない。

(2) 現実自己の吟味

調査内容 現実自己の吟味について B さんは以下のように語る。

まあ、ことなかれな感じとか。まあ、めんどくささを考えたりとか。ま、結局、快樂優先主義みたいなのがある。んー。全部の基準が楽しいか否かみたいな。そういうふう生きとるね。

B さんは、自己分析は行っておらず、漠然と自分ってこんなものというくらいにしか理解していないことがわかった。つまり、現実自己をまだ吟味していないといえる。

(3) 現実状況の吟味

調査内容 現実状況の吟味について B さんは以下のように語る。

就職難やあいう昨今でありますけれども、まあ別に就職できないとはまあ、そやなあ、別にできないと思うこともないし。あんまり社会って関係ないような。そんなにあるとは絶対いいきれんけれども、そんな大きな、5割以上を占めるようなファクターではないと思う。自分の中で。社会状況とか、企業の状況とかはあんまり気にしないよねー。

B さんは現実状況について漠然と知識はあるが、吟味は行っていないといえる。また、現実状況はあまり関係ないと感じていることがわかる。

(4) 理想自己と現実自己のギャップ

調査内容 就職活動期の理想自己と現実自己とのギャップの認知と対処について B さんは以下のように語る。

ギャップがないっていったのは多分、もう、保守的な性格もあるから。今とかわからない

感じずっといきたいわけ。根本は変わらずに、付加的なもんがあがっていければいいという考え方やから、その理想と、把握している自分にギャップがないんやと思う。

Bくんは理想自己と現実自己との間にギャップを感じていない。それは、現実自己に理想自己を近づけようとしているからであり、現実自己が理想自己に優先していることがわかる。

(5) 理想自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実状況とのギャップの認知と対処についてBくんは以下のように語る。

んー、いやあ、どうやる、そりゃわからへんねえ。それはもう就活前線にも、踏み込んでないから、判断しようがないね。それは。

そこまでして意固地になって、おれがおれがっていうのもないし。確固たるこういうのがしたいっていうのもない。ほんまにないっていうわけではないけれども、まあまあまあ、その、その都度多分自分で考えて、そのギャップでどっちがええんやるかあっていうんを考えたら、多分社会の方を選ぶんやと。

就職活動を始めていないBくんは理想自己と現実状況の間でギャップをまだ感じていない。だが、もしギャップを感じたならば、現実状況に理想自己を合わせるということがわかった。つまり、現実状況が理想自己に優先することがわかる。

(6) 現実自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の現実自己と現実状況のギャップの認知と対処についてBくんは以下のように述べる。

ギャップっていうのが、まずわからへんわな。

それが具体的に何かはおれはわからんけど。その場合仕事やし、やっぱりお金もら

う仕事っていうんはしんどいもんがあるし、まあまあまあ、楽しいいきたい人間やから、人間やけども、お金は欲しいし、働くということをなめてはいないし、大変なことやと思うし、まあ、だから、それはそれとして、生きてくためには、仕事はせないかんから、変わる必要があるなら、変わるね。

就職活動を体験していないBくんにとっては現実状況の吟味が行われていないことから、ギャップというものはわからないことがわかる。しかし、もし現実自己と現実状況との間にギャップが感じられたら、現実自己を現実状況に合わせることがわかった。つまり、現実状況が現実自己に優先するということがわかる。

(7) モデル化

以上のことをモデル化すると図3のようになる。

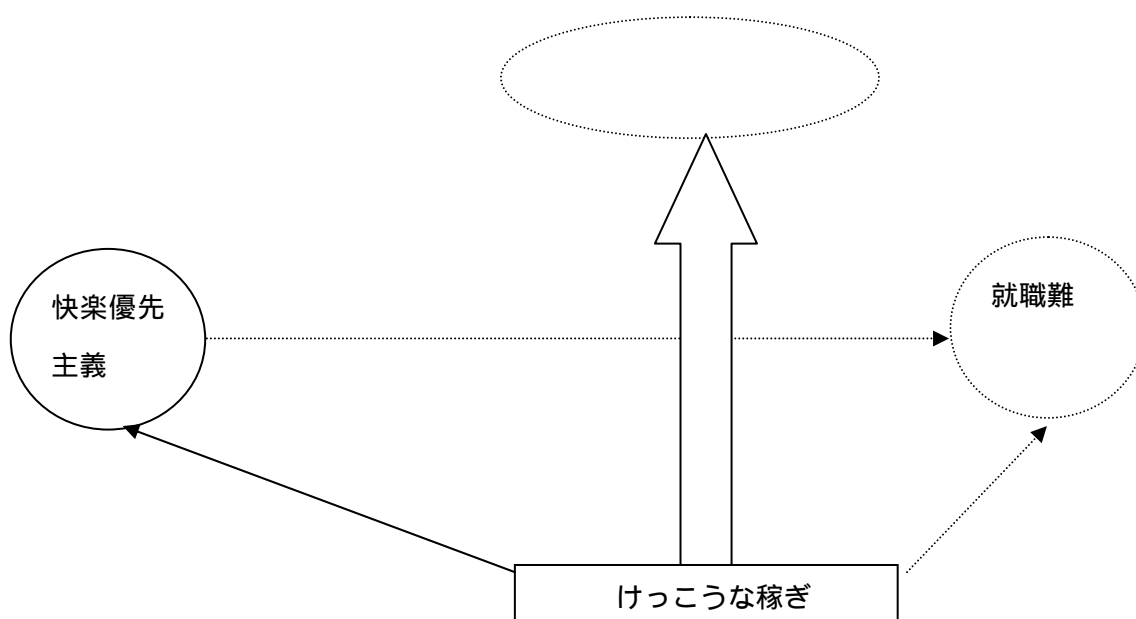


図3 Bくんのキャリアデザイン構築プロセスモデル

Bくんの理想自己もAくんと同様に、就職活動初期ということもあり、将来の理想自己は未定であるから、まだ点線である。現実自己の大きさは(2)で自己分析をしておらず、漠然と自分はこうであるとおるようにより吟味されていないので、小さく、現実状況も(3)で社会状況や企業の状況はあまり関係ないとおるようと同様に吟味されていないので

小さい。また、現実状況に関しては、まだ就職活動を始める前なので、実際に現実状況に触れていないということから、実を伴っていないので点線である。また、就職活動初期の理想自己が現実状況により近いのは、自分を押し通してしんどい思いをするよりも、社会に合わせる方が楽でいいという考えから、相対的に見て、現実状況の方が現実状況よりも大きく影響しているといえるからである。現実自己と理想自己間を説明すると、快樂優先主義という現実自己が結構な稼ぎは欲しいという理想自己の形成に相対的に影響をほとんど与えていないことから現実自己と理想自己間の矢印は細く、また(4)で見たように、今の自分を変えたくないといったように、現実自己が理想自己に優先することから、矢印は現実自己に向かっている。現実状況と理想自己間を説明すると、昨今は就職難だという知識はあるが、それは相対的にはあまり理想自己には影響を与えていないので矢印は細く、また、もしギャップを感じたなら社会を選ぶということから、まだ実行には起こしていないので、点線である。そして、(5)にあるように就職活動を始めてないから判断は出来ないが、もしギャップがあるなら社会を選ぶと答えていることから、現実状況が現理想自己に優先するので矢印は現実状況に向かっている。現実自己と現実状況間について説明すると、(6)で見たように、生きていくために仕事はしないといけないから、変わる必要があるなら変わるとあることから、現実状況は現実自己に優先するので、矢印は現実自己に向かうが、まだ行動を移していないから、点線になる。

3.3 Cくん

Cくんは穏やかな、人のよさそうな大学4年生である。芯の強いタイプで、真面目な印象を受けるCくんは、最終的に地元のケーブルテレビ局に就職が決まった。

(1) 就職活動初期の理想自己

Cくんは調査内容 の就職活動初期の理想自己について以下のように語った。

ひとまずはアナウンサーで、局で、活躍というか、できればと思っておって、でも、一方で実は、自宅が建築の会社と、お袋がリトミックと音楽教室をしておると。いうことで、いずれは、うちに帰らなけりゃいけないと、いう思いもあったんよね。で、どっちかというそっちの方が強かったから、とりあえずやりたいことをやる。

就職活動初期のCくんにとって、結局は家業を継ぐということから、現実状況を加味することなく、理想自己には現実自己のみが大きく関与している。つまり、理想自己にアナウンサーという職種をあげているものの、それに具体性はなく、ただそれをやりたいという思いが漠然とあるように思われる。

(2) 現実自己の吟味

調査内容 の現実自己の吟味についてCくんは以下のように語る。

いろんな人からアドバイスをもらったりもして、大体、今はほぼこれだろうというような形では、うん、確定できるようになったね。

人と接したい。んで、人にサービスをしたい。人を喜ばせたい。そういう志向はあるなあと。だから逆にルーティーンで、一人でもくもくとする仕事は嫌だなあと思った。

Cくんは現実自己を、他人のアドバイスによって明確化した。つまり、他者を通して現実自己を明確化したといえる。そして、その現実自己が理想自己に与える影響が大きいということがわかった。

(3) 現実状況の吟味

調査内容 の現実状況の吟味についてCくんは以下のように語る。

アナウンサースクールに通ってた。あと、京都市内のコミュニティFMでもうかれこれ1年半くらい、ニュース読みのボランティアをしてたのね。その他、司会のお仕事とか。

どんな業種があるか、この業界はどうなっているのかっていうほんまにそのまんまやけど、例えばこんな企業があるんだとか、この企業は業界の中でトップなんだとか、実はこの業界にあの企業がはいってたんだとか、というような、ほんとに基本的なことをわかってなかったから、そこわかったなあとというのが結構あった。

Cくんは、喋ることが好きということから、アナウンサーの特訓として様々なことをしてきた。しかしながら、現実状況はあまり吟味していない感じを受けた。それは、いずれ家に帰り、家業を継ぐということがきまっているからであり、前述のとおり、アナウンサーはとりあえずやりたいことをやるということが前提にあり、Cくんのキャリアデザインにおいては、現実自己と理想自己が大きな影響を持っているという印象を受けた。

(4) 現在の理想自己

調査内容 の就職活動を終えたあとの理想自己についてCくんは以下のように語る。

リトミックやその他音楽などを、主軸に、もちろん付加価値やプラスアルファも考えながら、活動を広げていけることをやりたいなと。漠然としていたところから、具体性が出てきたということが、ちょっと変わったところかな。具体的に言うと、一人前ということ、社会的地位とかそういうものよりも、人とパートナーシップを築きながら、クリエイティブな仕事をしていくことが理想やね。

就職活動を終えて、理想自己は活動を広げていくことをやりたいということに変化した。リトミックを広げるということであるが、Cくんは卒論でリトミックを研究していることから、その効果、リトミックの現状をわかっている。しかし、キャリアデザインの観点では、それはあまり社会状況の影響を受けていない。つまり、理想自己は具体化したけど、それは主に現実自己に影響を受けていると言える。

(5) 理想自己と現実自己のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実自己とのギャップの認知と対処についてCくんは以下のように語る。

アナウンサーになりたいという希望の自分が投げかける自己矛盾かなあ。あまりテレビが好きではないのよ。喋るのが好きってのがむしろテレビはダメなんじゃないってのが自分の暗いところから出てきて、それがギャップっていうか、いや、もっと大きなギャップっていうか。

地元の特化したケーブルテレビっていうところが緩衝材になったのかなと、一般的な放送局だと、どうも普遍的なニュースを扱う場合が多いけど、ケーブルテレビってというのはテレビの仕事をするよりも、地元の人のために働いているっていう意味合いが強いから、それが、一番自分の中の納得点。

Cくんは就職活動中に理想自己と現実自己の間にギャップを感じていて、それは喋るのが好きからテレビ局アナウンサーを受けているが、テレビはあまり好きではないということであった。そして、そのギャップの対処法としては、内定をもらったところが地元密着型のケーブルテレビで、やりたいことができることからそのギャップは解消された。つまり、Cくんにとって、理想自己が現実自己に優先することが明らかになった。

(6) 理想自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実状況とのギャップの認知と対処についてCくんは以下のように語る。

そこはとくに考えてなかった。いや、なんかもともと、溝はあるもんだらうっていうふうに、多分暗黙に思って部分もあるんやと思うけど、特に意識上、そういうんは考えなかった。

Cくんは理想自己と現実状況とのギャップを意識していなかった。ここからも、現実状況の吟味があまりなされていないことが伺える。つまり、理想自己が現実状況に優先していることがわかる。

(7) 現実自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の現実自己と現実状況のギャップの認知と対処についてCくんは以下のように述べる。

テレビを見てると、やっぱりこう画面をにぎわすのは、アナウンサーで美男美女だと。ベクトルがそういうふうに、局がね、てか、放送業界がそういうふうな人材とい

うか、もちろんうまくしゃべれるってことよりも、どうしても見てくれのほうだとか、そういった芸能人的な、そういう嗜好があるような感じが見えて、そしたらどうしても、自分とは違うなっていうふうに、合わんなっていうのは薄々感じてたね、そう言えば。

これは、もう開き直ってた。しゃあないやろって思って。それで、いらんいんならきられるやろうし、それでも、自分みたいな人が必要なら、とってくれるだろうっていう。だから、ぼくも対処のしようがないというか、ある意味ね。

Cくんは現実自己と現実状況のギャップは感じていた。けれども、そのギャップの対処は行わず、まずは自分ありきという考え方を持っていた。つまり、現実自己が現実状況に優先するということが明らかになった。

(8) 理想自己に影響を与えたその他の要因

調査内容 の就職活動期に理想自己を実現をするにあたり影響を与えたものについて、Cくんは以下のように語る。

常に方向が変わったり、考え方に示唆を与えてくれたものは、他者の助言だったなと、ほんまにそれに尽きるなど。だからそれは親であったり、友人であったり、先輩であったり、恩師であったり。そういうものが結局今のある自分のところに全て影響してきてるなって思う。

他者を通して自分の考えが変化し、また統一されたりすることがわかる。つまり、他者を通して自分の位置付けをすることをできたということがわかる。

(9) モデル化

以上のことをモデル化すると図4のようになる。

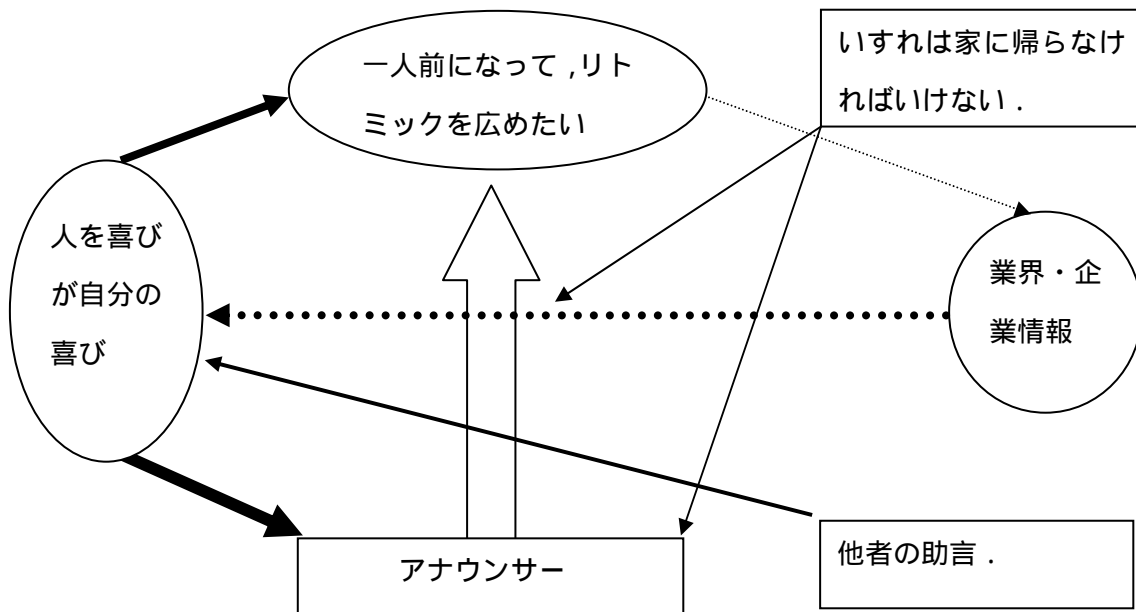


図4 Cくんのキャリアデザイン構築プロセスモデル

就職活動初期のCくんの理想自己はアナウンサーで、喋ることが好き、サービスをしたという現実自己のみの影響を受けているので、理想自己は現実自己に近づいている。現実自己の大きさは(2)でいるんな人からアドバイスを受けて自分は大体こうだろうということが確定できるようになったとあるように、よく吟味されているので大きい、現実状況は(3)で見たように最終的には家業を継ぐという目標があるためか、漠然とした業界の知識があるくらいなので小さい。現実自己と理想自己間を説明すると、人を喜びが自分の喜びという志向に強く関連していることから現実自己と理想自己の矢印は太く、また(5)で見たように、理想自己実現するためにアナウンサースクールに通ったり、ボランティアをしたりといったように、理想自己が現実自己に優先することから、矢印は理想自己に向かっている。現実状況と理想自己間を説明すると、ずっとアナウンサーを目指し続けていたことから、まったく理想自己には影響を与えていないことがわかるので、矢印は細く、(6)で最終的には家業を継ぐということから現実状況の吟味はさほど必要ではなく、ギャップは考えたことがないとあることから理想自己が現実状況に優先するので矢印は理想自己に向かっている。現実自己と現実状況間について説明すると、(7)で見たように、ギャップの影響力は大きいが開き直っているので、矢印は現実自己に向かい、太さは太い。

現在のDくんの理想自己は一人前になって、リトミックを広めて人の役に立ちたいということであり、それは親がやっていることで、Cくんは卒論でリトミックを研究している

ことから、その効果、リトミックの現状をわかっているが、相対的にそれをやりたいという現実自己がとても強いために理想自己は現実自己に近づいている。現実自己と理想自己間を説明すると、内定をもらったために現実状況が影響力を持ち始めたことから、相対的に現実自己が理想自己に与える影響はほんの少し弱くなったが、まだ強く影響を受けているので太く、(5)で実はテレビはそれほど好きではないが地元のために働けるから納得しているというように、理想自己は現実自己に優先するので、矢印は理想自己に向かう。現段階の現実状況と理想自己間について説明すると、やりたいことがやれる状況のためにギャップはないが、もしギャップがでてきたなら会社を優先することから現実状況を優先するということがわかるので矢印は現実状況に向かっていて、その矢印は点線である。

理想自己に与える現実自己と現実状況以外の要因としては、(8)で見たように他者の助言挙げられる。そして、その助言は現実自己のふりかえりとして影響を及ぼしているので、矢印が現実自己の推移に向かっている。

3.4 Dくん

Dくんは明るく、活発そうな印象を受ける大学4年生である。頭脳派というよりは行動派といった感じで、誰にでも好かれるタイプのDくんは某証券会社に就職が決まった。

(1) 就職活動初期の理想自己

Dくんは調査内容 の就職活動初期の理想自己について以下のように語った。

とにかく一番が金儲けをしたい。

自分が楽しく働けて、なおかつ、金がいってくればそれでいい。それが、一番の最終的なものであるけど、具体的にってのは多分ないと思う。

就職活動初期のDくんの理想自己は現実状況とはかけ離れたものであった。現実自己を具現化したものとして理想自己があるという印象を受けた。

(2) 現実自己の吟味

調査内容 の現実自己の吟味についてDくんは以下のように語る。

とにかく自分っていうのは人に対して、あまり興味をもっていないようで、意外に興味をもっているとか。あとは、なんていうのかな、とにかく考える前に行動することであるとか、あとはなんだろう、やっぱエントリーシートに書いた酒と人脈だね。酒を通していろんな人と付き合える。

Dくんは現実自己を、酒を通して人と接することにより明確化したといえる。つまり、他者を通して現実自己を明確化したといえる。そして、色んな人と酒を通して接したいという気持ちから金と自分の楽しみというものが理想自己としてあるのだというように、現実自己が理想自己に与える影響が大きいということがわかった。

(3) 現実状況の吟味

調査内容 現実状況の吟味についてDくんは以下のように語る。

とりあえず、仕事をして楽しいときもあれば、つらいときも絶対ある。けど、つらいときの方が絶対多い。それを我慢できるやつがいるかどうかって言ったら、今は少ないってさ。

後半から絶対金融に行こうって思ったから、金融のことについては聞いて、で、具体的な情報っていったら、朝の5時には起きてて、新聞も全部目通してて、で、今日の為替取引きだったりとか、その証券取引で行われる始まるの時間はいくらだとかわかってる。で、あとは、大体仕事おわんの9時10時。金融の場合はセキュリティーとかの問題もあるから、10時以降は会社は閉まるっていう状況。とにかく毎日が勉強。

Dくんは現実状況について、金融業界で働く先輩から仕事の大枠については詳しく聞いていて、知っているようだった。現実吟味は行われることができないが、現実状況は吟味されていることがわかった。

(4) 現在の理想自己

調査内容 就職活動を終えたあとの理想自己についてDくんは以下のように語る。

営業で一番をとるっていう。

うちの会社っていうのが、会社から課題を出されている。毎月一回。そういうのやってって、やっぱり、成績次第でいろいろ決められてしまう。多分今おれらが、出されている課題っていうのが、今、勤務地に響いてくるわけ。一応勤務地の希望は出したんだけど、多分、課題の成績とかで、決めていくんちゃうかなって。やっぱ、今の時点から、成果第一主義みたいな話になっているから、だからそういうので、営業で一番とりたいてっていうのも考えてきたのかなってのもある。

就職活動を終えて、D さんの理想自己の大枠は変わっていないが、営業で一番というように具体化された。就職先からの毎月の課題により、理想自己と現実状況を離して考えられなくなった結果であり、現実状況との関わりにより理想自己の明確化が行われたものだといえる。

(5) 理想自己と現実自己のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実自己とのギャップの認知と対処についてDさんは以下のように語る。

証券マンは毎日勉強しなきゃいけないけど、あんま勉強したくない。でも、なんで証券マンになったかという、もし自分が社会に一人でほっぽり出されて、生きていけるだけの知識を経験値をもっているかっていう意味で、証券マンやったほうがある程度有利になるんじゃないかなっていうのもあったし、それが証券マンになった一番の理由かも。

自分の飯かかってるから、自分がこういう風にならなければならないっていうよりは、こういう風にならざるを得ない窮地を作る。そこで、ギャップがあったからって折れる気はない。

D さんは就職活動中に理想自己と現実自己の間にギャップを感じていて、それは自分の

理想自己には勉強が付きものだが、勉強が嫌いだということだった。しかし、理想自己に近づくために勉強が必要なら、それは厭わないという気持ちを持っていることがわかった。つまり、理想自己は現実自己に優先するといえる。

(6) 理想自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実状況とのギャップの認知と対処についてDくんは以下のように語る。

証券業界っていうと、証券業界に限らず金融業界っていうのは、今年とかなの場合は団塊の世代ってのがどんどん抜けてく年やから、新卒の社員をいっぱい入れてく。例えばみずほは1500人、銀行の場合は1500人としたし、うちがいく証券の方も200人くらい。けっこう大量採用してるけど、でも結局金融系で残っていくのが、5割以下だから、そういうので、ギャップていうか、自分がほんとにがんばっていけるのかなっていう不安は多少はある。

証券業界も苦しいって言われてるけど、なにかしら続けていけるし、楽しいこともあるだろなっていうのがあからかな。

Dくんは就職活動中、理想自己と現実状況とのギャップを採用人数の点で感じていた。しかし、現実自己を吟味した結果、がんばれるという自信が見つけられた。また、理想自己を実現するためには避けられないから、がんばらなければならないという気持ちも見えた。つまり、Dくんにとって、理想自己は現実状況に優先するということがわかった。

(7) 現実自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の現実自己と現実状況のギャップの認知と対処についてDくんは以下のように述べる。

溝っていうか、課題。やりたくない。

課題っていうのもぎりぎりにならないとやんない。やりださないっていうのもある

し、これ働いていったら絶対しばかれるだろうなあって思ってるから、だから最近はずっと少しずつでも、課題をこなしていこうとは思ってる。だんだん自分をそっちの働くモードっていうほうに切り替えていかないと、やっぱりね、最初の仕事を始めたときに絶対つまづくところだから。そういう自分の生活リズムっていうか習慣は変えていこうとはおもってる。

就職活動期の現実自己と現実状況のギャップは影響力を持たなかったが、就職活動を終えて、現実自己と現実状況のギャップは感じるようになった。そこで、Dくんは現実自己を現実状況に合わせていこうとしている姿勢が伺える。ここから、現実状況が実質的な意味合いを持ち始めると、現実自己は現実状況に合すように近づくということがわかる。つまり、就職活動が終わり、現実状況が明確になると、現実状況は現実自己に優先することがわかった。

(8) 理想自己に影響を与えたその他の要因

調査内容 の就職活動期に理想自己を実現をするにあたり影響を与えたものについて、Dくんは以下のように語る。

それは先輩やな。あのー、おれもういっこ経済のゼミ入ってて、そのおれの一個上の先輩にみずほ銀行にいっためっちゃ頭いい先輩がいたんやんか。んで、おれその人と、ま、お門違いだけど、将来的に勝負をしようってことになって。(…中略…)そういう金融業界で勝負をしようっていうみたいな約束をしたから、自分としても負けたくないっていうのもあったし。そういう目標とする人がいた。

Dくんは就職活動でロールモデルを使った理想自己へのアプローチをしていたことが明らかになった。つまり、目標とする先輩を通して、働く自分像を明確していることがわかる。また、その先輩を通して、理想自己、現実自己を明確していることもわかった。

(9) モデル化

以上のことをモデル化すると図5のようになる。

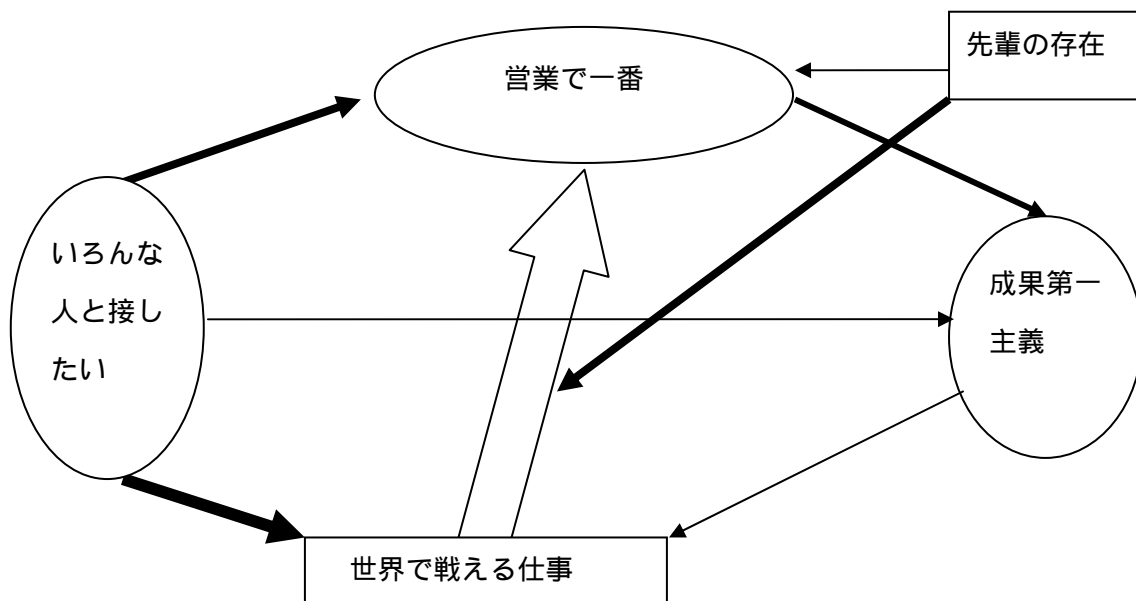


図5 Dくんのキャリアデザイン構築プロセスモデル

就職活動初期のDくんの理想自己は世界で戦える仕事で、相対的に現実状況よりも現実自己の影響を強く受けているので、理想自己は現実自己に近づいている。現実自己の大きさは(2)で見たように酒を飲んで他者と関わることにより、自己はよく吟味されているので、大きく、現実状況も(3)で見たように先輩に金融の仕事についての詳細な情報を得ているので同様に大きい。現実自己と理想自己間を説明すると、いろんな人と接したいという現実自己が世界で戦える仕事という理想自己の形成に強く関連していることから現実自己と理想自己の矢印は太く、また(5)で見たように、理想自己に現実自己を合わせていくために勉強しているといったように、理想自己が現実自己に優先することから、矢印は理想自己に向かっている。現実状況と理想自己間を説明すると、採用人数が多いということだけでやっていけるのだろうかという不安はあるが、楽しいこともあるということで自分自身を納得させていることから、現実状況は相対的にはあまり理想自己には影響を与えていないので矢印は細く、また理想自己が現実状況に優先することから矢印は理想自己に向かっている。現実自己と現実状況間について説明すると、(7)で見たように自己と社会とのギャップは感じておらず、まず自分ありきの考えであることから、現実状況は現実自己に優先するので、矢印は現実状況に向かう。また、課題をやってはいるが、ぎりぎりにならないとやらないということから矢印は細い。

現在のDくんの理想自己は営業で一番をとることであり、それは現実自己と現実状況が

ら同じくらい影響を受けているので、理想自己は現実自己と現実状況のちょうど真ん中くらいになる。現実自己と理想自己間を説明すると、相対的には現実状況が影響力を持ち始めたので現実自己が理想自己に与える影響は少し弱くなったが、まだ強く影響を受けているので太すぎないくらいの太さであり、(5) で見たように、理想自己を実現するために自分を変えようと、自分を仕事には飯がかかっているという窮地に追い込んでいることは変わらないことから、理想自己は現実自己に優先するので、矢印は理想自己に向かう。現実状況と理想自己間について説明すると、(4) で出てきたように会社からの課題が勤務地に響くということから、現実状況が影響力を強くもつようになってきていることがわかるので、矢印は太くなり、課題をやっているということから、現実状況が理想自己に優先していることがわかるため、矢印は現実状況に向かっている。

理想自己に与える現実自己と現実状況以外の要因としては、(8) で見たように目標とする先輩が挙げられる。そして、その先輩の存在は理想自己の形成に影響を与えているので、矢印が理想自己の推移に向かっている。また、営業で先輩と勝負するということから、将来の理想自己にも影響を与えていると言えるので、矢印が向かっている。

3.5 Eさん

Eさんは温厚でのんびりした印象を受ける社会人1年目である。理論派というよりは感情で動くタイプのEさんは某食品企業で勤務している。

(1) 就職活動初期の理想自己

Eさんは調査内容 の就職活動初期の理想自己について以下のように語った。

やっぱり食品にいきたかったなあってのはある。やっぱり食は絶対に欠かせないものだっていう、強い使命感みたいなものを、感じてたんやろなあ、あの頃は。やっぱり食に関わる仕事がしたいなあって思って。

Eさんの就職活動初期の理想自己は食品で仕事をしたいということであることがわかった。しかし、それは現実状況を加味していない、ただ漠然としたものであったことがわかる。

(2) 現実自己の吟味

調査内容 の就職活動期の現実自己の吟味について E さんは以下のように語る。

ちょこちょこ程度に。あんま気を入れてなかった。

おれずっと営業希望してたから、営業を通して人と接する中で、で、まあ、自分の悪いところもわかるし、良いところもわかってくるもんだと思うし、そういうところで、接しながら、自分を成長させていきたいなあっていう。

E さんは就職活動期には、人と接したいという漠然とした思いがあるだけで、あまり現実自己の吟味は行われていないことがわかる。

次に、現段階の現実自己について E さんは以下のように語る。

先の見とおし甘くて、いいかげんで、あと、中途半端にプライドが高いというか、自己意識が強いというか。あと頑固とかだよなあ。頑固で融通がきかなくて、あと、会社入って思うけど、自分にあんま自信がない気がするなあ。それを会社入ってから、仕事とかで、努力して自信をつけていかなければいけないんだろうけど。

E さんの現実自己は実際の仕事を通して吟味され明確化されていることがわかった。つまり、現実状況を通して現実自己の吟味が行われていることがわかった。

(3) 現実状況の吟味

調査内容 の就職活動中の現実状況の吟味について E さんは以下のように語る。

あんま正直しらなかった。そういう、だから、ほんまにおれスーパーに魚売りに行くのかなあってぐらいのレベルやったのね。

当時わかった範囲っていったら、もう、水産に関する知識なんてほとんどなかったからね。とりあえず、輸入して魚をいろんな世界中から輸入して、で売るってことくらいしかしらなかったから。

Eさんは就職活動中、現実状況の吟味はほとんど行わなかったことがわかった。ここから、現実自己の影響が理想自己を描くことに大きく影響していることがわかる。

次に、現段階の現実状況の吟味についてEさんは以下のように語る。

今、水産部っていうところにいるけど、そこの部自体がもう、営業の仕方ってというのが、例えば、水産の営業っていうのはけっこう特別な部分があって、(...中略...)水産ってというのが、なんていうのかなあ、魚ってのは常に相場ものだから、とれなかったら価格は上がってくるし、需要と供給のバランスで、相場でも価格は常に変動してるから、だから、今までと違ってたところが、やっぱり価格が上がるとなったら、買ってくれなかったりとか、ま、そういう不安定な部分があるから、水産の営業ってというのが、ある定度人それぞれなの。ほんとに、決まった形で営業の、決まったスタイルがなくて、だからほんとに、もう友達みたいに仲良くなって、市場の人とかなあ、仲良くなってやる人もいるし。仕事は仕事、個人は個人、まあ、割り切って仕事をやる人もいるやろうし、だから、仕事の決まったやり方っていうのがないから、会社がどんな人物像を求めているかっていったら、正直、まあ、もう、利益さえあげてくれたらいい。

仕事を始めると現実状況を吟味せざるをえないことから、Eさんは仕事を始めてから現実状況の吟味は行われていることがわかった。

(4) 現在の理想自己

調査内容 の現段階の理想自己についてEさんは以下のように語る。

やっぱり一人前の営業マンで、バリバリ売れるような、仕事のできる営業マンにはなりたいとは思ってる。

仕事を始めてEさんの理想自己の大枠は変わっていないが、一人前の営業マンというように具体化された。実際に働くということを通して、否応無しでも現実状況を吟味することを余儀なくなれた結果、理想自己と現実状況を離して考えられなくなり、現実状況との

関わりにより理想自己は明確化が行われたものだといえる。つまり、現実状況によって現実自己が明確化され、それらの統合を図るものが理想自己だということがわかる。

(5) 理想自己と現実自己のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実自己とのギャップの認知と対処についてEさんは以下のように語る。

感じなかったなあ。そもそも自己分析自体をそんなに深くやってたわけじゃなから。あんまりその時点での自分っていうのも正直いって就活だけのために飾り立てていう部分が多かったから、そういう意味では就活し終わったあとのギャップっていうのはあんまり感じなかったと思うわ。

Eさんは就職活動中に理想自己と現実自己の間にギャップは感じなかったようである。それは現実自己の吟味を行わなかったからであり、ギャップの感じようがなかったことがわかった。ただ漠然と理想自己があったのであり、つまり、理想自己が現実自己に優先していたことがわかる。

次に現段階での理想自己と現実自己とのギャップの認知と対処についてEさんは以下のように語る。

人間関係で、お客さんとの付き合いってのを、ちょっと自分なりに考えないといけないなっていうのがあって、まあ、要は相手の心をいかにつかむかっていう、(...中略...)人間同士の付き合いっていうのを一番求められているような気がするんだよ。だから、やっぱり、まずそういうお客さんとお互いの信頼関係をつくって、んで、まあ、相手の心を知って、自分の心開いてかなきゃならないし、だからもっと積極的にお客さんと話して、お客さんのことを知って、自分を知ってもらう、ってそういうところが今おれちょっと足りてないなあって、そのあたりがギャップやなあ。

週に2回3回は、今日も市場行ってきたんやけど、朝4時とか、まあ3時くらいかなあ、3時くらいに市場行って、お客さんと話して、魚とかみて回って、で、これはどこ産のですかとか、これいくらぐらいですかとか、そういうことをしながら、まあ、

お客さんに顔を売るってことやんなあ。で、話せるような関係を作る。あと、まあ電話とかで、ま、関西以外のお客さんやったらま、出来る限りやっぱり電話かけて、今日なんかありませんかとか、そういうような話をして、ま、とにかく自分って人間がいるってことをしてもらわないと、話にならないから、だから最近ほんとうにそういうことを心がけてる。それぐらいやな。一生懸命やろうとしてるのは。あとまあ、細かいミスをしないように常に気をつけてやるとか。

Eさんは現在、仕事における人間関係の築き方という点と自分の曖昧な性格という点でギャップを感じている。一人前の営業マンになるという理想自己を実現するためにEさんは、顔を売るために市場に行くということをしており、現実自己を理想自己に近づけようとしていることがわかる。つまり、現段階でも、理想自己は現実状況に優先することがわかる。

(6) 理想自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実状況とのギャップの認知と対処についてEさんは以下のように語る。

まったく感じなかった。入ってからのギャップはでかかった。

Eさんは就職活動中、理想自己と現実状況とのギャップはまったく感じなかったということがわかった。これは、前述の通り、現実状況が吟味されていないことが要因になっていることがわかる。

次に現段階の理想自己と現実状況とのギャップの認知と対処について以下のように語る。

今の自分とのギャップっていうふうに考えたら、やっぱり足りないものっていうのは、曖昧にしてしまうとこなんだよなあ。とにかく、確認を怠ってしまう、めんぐさがっちゃうところとか、いい加減にしてしまうところとか。よく考えると、とりあえずなんとなく、あいまいな感じで仕事がつながったらそれでもうオッケーみたいな感じで、考えてる部分がいまだになんかちょっとね、ぬけないところがあって。

細かいミスをしないように常に気をつけてやるとか。

現段階では、Eさんは仕事で求められる正確さという点でギャップを感じているようである。そして、それを自分の欠けている部分を補うことでギャップを埋めようとしていることがわかった。そこから理想自己を現実状況に近づけようとする姿勢がわかる。つまり、現実状況は理想自己に優先していることがわかった。

(7) 現実自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の現実自己と現実状況のギャップの認知と対処についてEさんは以下のように述べる。

まったく感じなかった。入ってからのギャップはでなかった。

次に現段階の現実自己と現実状況のギャップについてEさんは以下のように語る。

正直なところ、今の自分が営業ってものにむいてるかって言われたら、正直むいてないみたいな、正直ほんとに。だから、自己分析っていうのと、企業研究とか、職種、営業職とか、を合致させるような就活の仕方はしてなかったんだと。自分はこういう仕事にむいてるんだろうなあとか、こういう生き方をしたいなあって考えて、で、それにあった職業を探そうっていうのはしなかった。やっぱりとにかく漠然と、食品に行きたい、営業に行きたいっていうふうな。だから、今けっこう苦労してんだろうなあ。

おれが今しなきゃいけないってことは、もう、市場に沢山通うこと、あと、お客さんに声かけて、お客さんと話して、自分をしってもらうことっていう、まず、そやな、積極的にお客さんのところに足を運んで、それができなかつたら、まあ、水産ではやっていけないってことだから。

Eさんは就職活動中もっと現実自己を吟味していればと思っていることがわかった。就職活動中は理想自己に合そうすることに重点を置き過ぎていて、現実自己に吟味しなかつ

た部分があったことがわかる。その現実自己の見えていなかった部分が、仕事をする事によって明確化された。つまり、現実状況の中に自分を置くことにより現実自己が吟味され、明確化されたといえる。そして、Eさんはその部分を補おうとして現実自己を現実状況に合わせるよう努力していることがわかった。現段階では、現実自己は現実自己に優先することがわかる。

(8) 理想自己に影響を与えたその他の要因

調査内容 の就職活動期に理想自己を実現をするにあたり影響を与えたものについて Eさんは以下のように語る。

正直ないなあ。外部的な影響って。

Eさんは就職活中、現実自己と現実状況以外で理想自己に影響を与えたものがなかったことがわかった。

(9) モデル化

以上のことをモデル化すると図6のようになる。

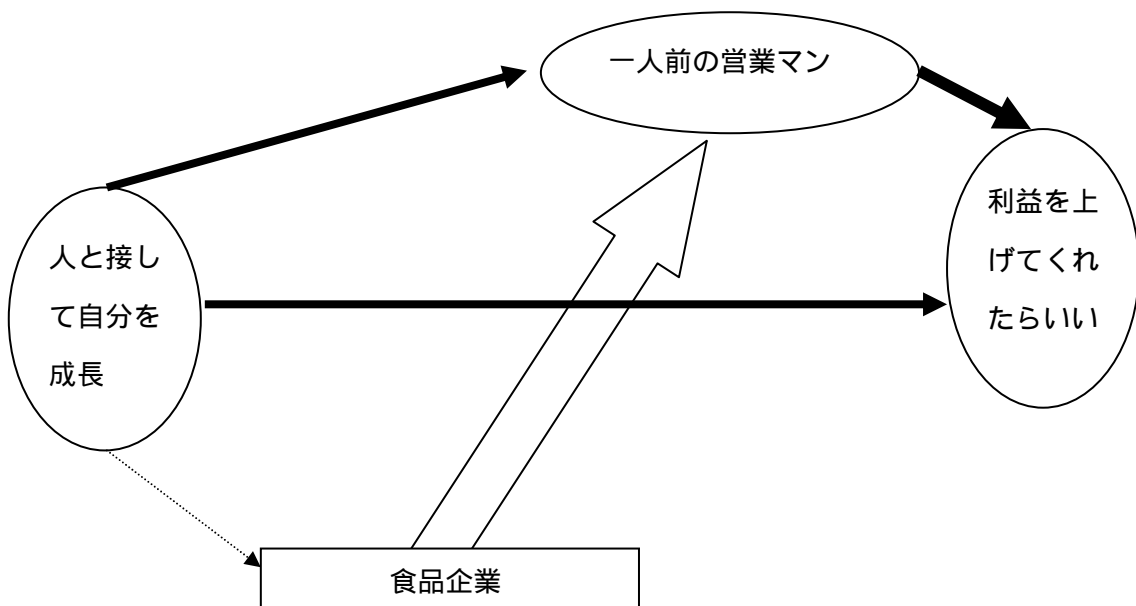


図6 Eさんのキャリアデザイン構築プロセスモデル

就職活動初期の E さんの理想自己は食品企業で、相対的に現実状況よりも食品に行きたいという現実自己の影響を強く受けているので、理想自己は現実自己に近づいている。しかしながら、就職活動中は(2)(3)で見たように自己分析も企業研究もほとんど行っておらず、現実自己と現実状況はほとんど吟味されていないが、仕事を始めてからは、実務を通して社会及び求められるスキル等と自分の曖昧さや足りないところをよく知るようになり、両方よく吟味されているのでどちらも大きい。現実自己と理想自己間を説明すると、(5)で見たように理想自己はただ漠然と食品に行きたいという希望があっただけであり、現実自己にほとんど影響を受けていないので、現実自己と理想自己の矢印は細く、また理想自己が現実自己に少なからず優先しているので、矢印は理想自己に向かっている。現実状況と理想自己間を説明すると、(6)で見たように全くギャップを感じてなかったということから矢印はない。

現在の E さんの理想自己は一人前の営業マンになることであり、それは相対的に人と接して自分を成長させたいという現実状況の影響をより受けているので、理想自己は現実状況に近づいている。現実自己と理想自己間を説明すると、(2)で見たように、実際の仕事を通して水産の営業がどんなものかという現実自己が吟味された結果、理想自己に与える影響は強くなったので、線は太くなった。また(5)で見たように、理想自己を実現するために顔を売るために市場に顔を出すなどの努力をしていることから、理想自己は現実自己に優先するので、矢印は理想自己に向かう。現実状況と理想自己間について説明すると、(6)で見たように、今までのどうにかなるだろうという甘い考えでは駄目だということを強く感じていることから、現実状況が影響力を強くもつようになってきていることがわかるので、矢印は太くなり、仕事ができるようになるために細かいミスをやらないように気をつけようとしていることから、現実状況が理想自己に優先していることがわかるため、矢印は現実状況に向かっている。現実自己と現実状況間を説明すると、(7)で見たように、自分は営業でやっていきたい、もしくは、やっていけるという想像と営業にはむいていないかもしれないという現実との間にギャップを感じてはいるが、それでもがんばって水産でやっていこうとしていることから、相対的に矢印は太めで、現実状況が現実自己に優先していることから、矢印は現実状況に向かっている。

3.6 F さん

Fさんは堅実で物事に対してシビアな印象を受ける社会人2年目である。感情よりも理論派タイプのFさんは現在某百貨店に勤務している。

(1) 就職活動初期の理想自己

Fさんは調査内容 の就職活動初期の理想自己について以下のように語った。

受けたのが百貨店関係と旅客業関係だったのね。なんかこう、人と関わる仕事をしたかったのかなあと。

インターンシップには一ヶ月間行ってたんで、百貨店の人がどう働いているのかとか知ってたんだけど、じゃあ自分がどうなるのかってのは、なかなかなかった気がするなあ。

就職活動中のなりたい自分っていうのはこの会社に入りたいだと思うんだよね。

Fさんの就職活動初期の理想自己は百貨店関係と旅客業関係という業界であった。就職活動を始めたときは漠然と人と関わる仕事がしたいと思い、就職活動を行っていたことが伺える。

(2) 現実自己の吟味

調査内容 の現実自己の吟味についてFさんは以下のように語る。

自己分析をしたこともそこまではないし、なんだろう、テクニクの部分がねえ、就職活動っていったら。

これこれこうだからこうなんです。っていう具体論を前におかないと、厳しいっていうのが就職活動中にわかってきたこと。それは就職活動の中で学習してきたこと。そこで、ぼくインターンシップ行ってましたよ。ぼく百貨店の裏側まで知ってますねん。っていうのがいえる。

Fさんにとって、現実自己はあまり吟味されていないような印象を受けた。だが、自分の意思はこの業界に入りたいということだということがわかる。自分がどうであるかというよりも、まず知識がどれだけあるかということに重点を置いて就職活動を行ってきたことがわかる。

次に、現段階の現実自己についてFさんは以下のように語る。

まあ、仕事をして評価をされるわけだし、上の人に。でも、ずっと評価される立場だったらおもしろくない。ぼくもやっぱりその人以上にできるって思ってるし、その人以上にできるようになりたいって思ってるし。やる以上は。

Fさんの現実自己は現実状況の中で評価されたいという仕事における志向だということだということがわかった。それは、実際に仕事をすることで明確化されていることがわかる。つまり、まず現実状況があり、その現実状況が現実自己に影響を与え、現実自己を明確化しているといえる。

(3) 現実状況の吟味

調査内容 の就職活動中の現実状況の吟味についてFさんは以下のように語る。

受けに来る人の中で全然知らない人と、インターンとかアルバイトとかして知っている人がいる。その知らない人たちっていうのは店頭の華やかな部分のイメージしか知らないっていうのを、人事の人達はおもっているから、そんなあまいこと言ってるけど、実際は結構しんどいよ、みたいなことを言うわけですよ。でね、インターンとかしてると、知ってるっていう前提がつくから。一ヶ月社員さんと一緒に働いて、これこれこういうこと知りました、っていうと、まあまあ知っとるわなっていう話になる。

Fさんはインターンシップに参加し、実際に現場で働くことにより実質的な現実状況の吟味をおこなったといえる。就職活動中及びそれ以前にしっかりと現実状況の吟味が行われていることがわかる。

次に、仕事を始めてからの現実状況の吟味についてFさんは以下のように語る。

僕の場合は、なんだろう、上司がおるわけですよ。で、その人が認めてくれたら仕事はもらえるわけですよ。

給料も別に高くないし、休みも不規則だから、そういう待遇面的な部分では、納得はしてはいけない気もするんだけど、でも、それは比較する対象がないから、ほかの会社行ったらどうっていうのもあるし、今仕事内容としても、おもしろいことをさしてもらっとるなあっていうんもあるから、その点ではいいかなあ。

Fさんの現実状況の吟味は、就職活動の段階でインターンシップに参加することで吟味されていたがそれでも、まだ見えないところがあったことがわかった。それは上司の存在と待遇の面であり、その部分も実際仕事をする中で吟味されているといえる。

(4) 現在の理想自己

調査内容 の現段階の理想自己についてFさんは以下のように語る。

今だったら、売上を求められる仕事をしている。直近の目標で言ったら売上を上げていく。将来的なことでいったら、その積み上げた売上でもっと大きなことがしたいとか。今だったら枠内でしか仕事できないけど、認められれば、ひとまわり大きくなるっていうのもあるしね。

成績を上げるのはそうなんだけど、選択肢をふやしていきたい。

Fさんの理想自己は就職活動初期の、こういう業界で働きたいとか、人と関わる仕事をしたいという理想自己と比べると、現在の理想自己は結果を残して、認められたいというように具体化している。就職活動中の選択肢は無数にあるにも関わらず、選択肢を増やして行きたいという言葉から一度就職することにより選択肢が狭められるということがわかった。つまり、就職して仕事を始めて、現実状況をより吟味することにより、理想自己は現実状況のより大きな影響を受けるといえる。

(5) 理想自己と現実自己のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実自己とのギャップの認知と対処についてFさんは以下のように語る。

例えば学歴っていう点で言ったら，京都大学のやつと早稲田のやつとぼくですわっとなら，しんどいなあって思うし，いうのも，社会学科社会学専攻ですっていうのと，経済学科経済学専攻ですっていうのでは，やっぱり切り口の視点が違うから。

隣のやつのいった鋭いことを今度自分がほかの面接で言おうと思う。

Fさんは就職活動中に理想自己と現実自己の間を学歴や専攻といった専門知識もしくはスキルといった点で感じていた。対処としては，他の人の良いと思った意見を自分の物にして，次の面接の対策とするということから，現実自己を理想自己に近づけているといえる。つまり，理想自己が現実自己に優先していたことがわかった。

次に現段階での理想自己と現実自己とのギャップの認知と対処についてFさんは以下のように語る。

ずっと評価される立場だったらおもしろくない。ぼくもやっぱりその人以上にできるって思ってるし，その人以上にできるようになりたいって思ってるし。やる以上は。

まあ，催事でそこそこ実績は残したからね。

Fさんは現在，立場という点で理想自己と現実自己とのギャップを感じていることがわかった。自分の実力が十分に認められていないということにギャップを感じていて，そのギャップは任される仕事内容という現実状況の影響を受けていることがわかる。その対処として，入社2年目ながら，催事という部門で結果を残した。それは，現実自己を理想自己に近づけたということがわかる。つまり，現実状況の干渉を受けながら理想自己は現実自己に優先していることがわかった。

(6) 理想自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実状況とのギャップの認知と対処についてFさんは以下のように語る。

資質とか,性格とか,価値観とか,これは個人が20何年で作ってきたものだから,現実の状況でこいつが採用されて採用されなかったっていうのは,仕方ないかなあと
思うんだけど,仕事に必要なスキルとかはまあまあ,ほとんど変わらないのかな
あと.でも,とおっていくやつとおっていかないやつがおるのは,性格とか価値観
うんぬんであるんじゃないかなあと.会社に求めているものと合う合ないがあるし.

合わないなって思ったら辞退したしね.

就職活動中のFさんの理想自己はこの企業に入りたいということであったので,理想自己と現実状況のギャップは企業が求める性格や価値観と感じていたようである.そして,その対処の方法は,自分の性格や価値観が合わなかったら辞退をするということから,理想自己が現実自己に優先するということがわかった.また,ここから,わかることは,現実自己と現実状況が合致したところがFさんの理想自己だということがわかる.

次に現段階の理想自己と現実状況とのギャップの認知と対処について以下のように語る.

今ってことで言ったら,給料も別に高くないし,休みも不規則だから,そういう待遇的な部分では,納得はしてはいけない気もするんだけど,でも,それは比較する対象がないから,ほかの会社いっとたらどうっていうのもあるし,今仕事内容としても,おもしろいことをさしてもらっとるなあっていうんもあるから,その点ではいいかなあ.

例えば,これだけできますっていうのを僕がもって,会社がその3分の1とか2分の1のことしか期待されてなかったり,あたえられなかったら,多分会社にはいないと思う.

現段階では,Fさんはやりたいことをやらせてもらっているということで,理想自己と

現実状況の間でギャップを感じていないことがわかる。しかし、もし自分に求められるものが自分の出来ることよりも小さいことがあるなら、転職もありえるということがわかった。つまり、もしギャップを感じるようならば、理想自己を優先することがわかった。

(7) 現実自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の現実自己と現実状況のギャップの認知と対処については調査内容 のとおり、Fさんの理想自己が現実自己と現実状況の合致したところに理想自己があるために、つまり、その会社に入れるか入れないかということであったから、理想自己と現実状況のギャップ = 現実自己と現実状況のギャップだということがいえる。

次に現段階の現実自己と現実状況のギャップについてFさんは以下のように語る。

仕事に必要なスキルと専門スキルは全然違うよね。あとは、専門スキルっていうのと仕事の中身ってちがう。ま、百貨店では高校からきましたっていう人と、僕みたいに大学から来ましたっていうひとがいるわけですよ。で最初はみんな一緒なんですよ。じゃあここでプラス4年間学んできたスキルとか知識はいきないんですよ。今だから言える現実との違いなんだけど。だからものすごい離職率が高いんですよ、大学卒に限って言えば。だからギャップがむちゃくちゃあるんですよね。

どう認めさせるかだと思うよ。専門スキルとか知識はもっていますと。それは高卒までのとは違いますねんと。

Fさんは現段階で、現実自己と現実状況のギャップを求められるスキルとか経験という点で感じている。その対処の仕方は、自分の専門スキルを認めさせるということだった。つまり、現実状況が現実自己に優先するということがわかる。

(8) 理想自己に影響を与えたその他の要因

調査内容 の就職活動期に理想自己を実現をするにあたり影響を与えたものについてFさんは以下のように語る。

父親の存在だよな . ずっとはたらいとるところを見とるわけですよ . 男の子としては .
まあ , こんなふうになるんやなあ . でー , じゃあ , 親父みたいになろうと思って同
じ道に行く人と , なりたくなあって思って , 違う道を行こうってひとがいて , 僕もど
っちかっていったらそれ以外で行こうって思った方だから . 銀行とか受けなかったし .

比較もされるしさ . 大きすぎると息子もなかなかしんどい .

F さんは就職活動を始めるときの理想自己を形成する段階で , 父親の存在が理想自己に
大きく影響を与えていることがわかった .

(9) モデル化

以上のことをモデル化すると図7のようになる .

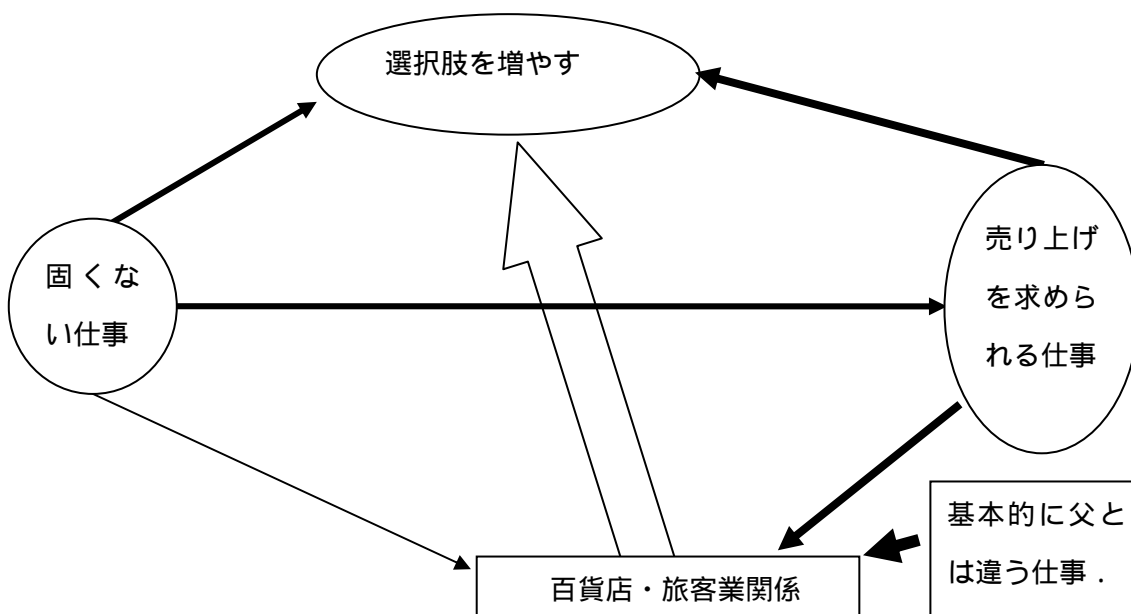


図7 Fさんのキャリアデザイン構築プロセスモデル

就職活動初期のFさんの理想自己は百貨店・旅客という業種で , (2)にあるように , 今
思うと人と接する仕事がしたかったと述べていることと , (3)でインターンシップに参加
することにより現実吟味がよく行われていることから , 相対的に現実自己よりも現実状況
の影響を強く受けているので , 理想自己は現実自己に近づいている . 現実自己の大きさは

(2)で見たように就職活動ではテクニックが大事と言っているように、現実自己はあまり吟味されているので小さく、現実状況も(3)で見たように学生時のインターンによって百貨店での仕事の中身を知っていたので、よく吟味されていたと言えるので大きい。現実自己と理想自己間を説明すると、百貨店・旅客業関係という理想自己の形成に、固くない仕事という現実自己はあまり強く関連していないことから現実自己と理想自己の矢印は細く、また(5)で見たように、ギャップを感じたときの対処は、いかに会社に受かるかを考えて実行するという事なので、理想自己に現実自己を合わせていこうという姿勢が伺え、そこから理想自己が現実自己に優先することがわかることから、矢印は理想自己に向かっている。現実状況と理想自己間を説明すると、それは相対的に見て、現実自己より理想自己に影響を与えているので線はやや太く。また、(6)で見たように合わないと思った企業は辞退するなど、理想自己が現実状況に優先することから矢印は理想自己に向かっている。

現在のFさんの理想自己は(4)で見たように仕事によって限定された選択肢の中で仕事において認められることを通して選択肢を増やすことであり、それは相対的に現実状況よりも自分の興味関心である現実自己の影響を受けている。だから、理想自己は現実自己に近づく。現実自己と理想自己間を説明すると、(5)で見たように仕事において結果を残したことで、やりたいことが出来るようになり、現実自己が理想自己に与える影響は強くなったので、理想自己と現実自己間の線は太くなる。また、理想自己を実現するために更に成績を上げていこうとしていることから、理想自己は現実自己に優先するので、矢印は理想自己に向かう。現実状況と理想自己間について説明すると、(5)で見たように、立場に不満をもっていて、やる以上は上の立場立ちたいという希望している。だから、現実状況の影響力が弱くなってきていることがわかるので矢印は細くなり、現実状況が理想自己に優先していることがわかるため、矢印は現実状況に向かっている。現実自己と現実状況間の関係について説明すると、(7)で見たように、自分の専門スキルをどうにかして認めさせたいということで、現実状況が現実自己に優先するから、矢印は現実状況に向かう。また、相対的に強い気持ちであるので、線は太めである。

理想自己に与える現実自己と現実状況以外の要因としては、(8)で見たように父の存在が挙げられる。そして、その先輩の存在は就職活動初期の百貨店・旅客業業界で働きたいという理想自己の形成に影響を大きく与えているので、矢印が理想自己の推移に向かっていて、線は太い。

self reflection

(1) 就職活動初期の理想自己

調査内容 の就職活動初期の理想自己については、私は漠然と店を出したいと思っていた。漠然とはしていたが、強く思っていたために、就職活動初期は短期間で成長できる仕事がしたいと思っていた。それは、現実状況をほとんど吟味せずに、現実自己に大きく影響を受け形成された理想自己だということがわかる。

(2) 現実自己の吟味

調査内容 の現実自己の吟味については、私は努力家で、人の心理に興味があるということがわかった。そして、自己成長というものを求めていた。そこから、元手のかからないサービス業種、とりわけ人材関連の企業を希望していた。そこで、コネクションも築けると思っていたからである。現実自己の吟味については出来ていたと思われる。もしくは、出来ていたと思こんでいる。現在は、若いときは仕事を必死でがんばりたいが、将来的には安定を求めている。

(3) 現実状況の吟味

調査内容 の現実状況の吟味について、私が社会状況、企業情報を調べることは、就職するための手段としてしか捉えていなかった。つまり、話のネタとしてや、会社の求める人材を調べて、自分をそれに重ねていこうとしていた。具体的に言うと、転職の平均が一人2回で、その大半が20代だとか、御社のそのサイトは業界一位で、それをこういった手段で今後発展させることによって僕がやりたいことができるといったことがネタであり、求める人材というのは、どのような成長を遂げている会社で、規模はどうか、理念はどうかということから、どのような人材を求めているのかを考えていた。つまり、上辺の部分での現実吟味は出来ていたといえるが、実質的な現実状況の吟味は行われていなかったように思われる。現在は内定先でバイトをしていて、ある程度は実質的な現実状況の吟味も行われている。

(4) 現在の理想自己

調査内容 の就職活動を終えたあとの理想自己について、私は現在トップセールスにな

りたいと思っている。これからの人生を考えたとき、社会で自立するためには結果が必要であると感じているからである。自分が結果を残すことによって会社を成長させ、そして自分の視野が広がると思っているからである。また、安定したいと思うようになった。そのため、どこに行ってもやっていけるだけのスキルを身につけたいと思っている。私の理想自己は就職活動を終えてある程度は明確化したといえる。そのきっかけは面接で落ちたことが深く関わっている。現実自己だけで理想自己を描いたところで、現実状況はそれを受け入れてくれないという現実と直面したとき、私の理想自己は現実自己に合すように変化していった。

(5) 理想自己と現実自己のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実自己とのギャップの認知については、私はあまり意識していなかったように思う。こうありたいという理想自己がまずあって、それに自分を合せていこうとしていたと思う。つまり、理想自己が現実自己に優先していた。

現在の理想自己と現実自己とのギャップは、私は人には関わりたいけど、人付き合いはそれほど得意ではないことである。就職活動で受けていたのは営業で、就職が決まったところも営業である。だが、人付き合いが苦手というだけで、人と接するのは好きである。そして、対処というところでは、その人付き合いが苦手という部分は補うことが出来ると感じている。だから、私はいろいろな人と話をして、どんな人とも話が出来るようになると努力している。つまり、理想自己は現実自己に優先することがわかる。

(6) 理想自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の理想自己と現実状況とのギャップは、就職活動中の企業説明会で、ビジネスは金ありきだと感じたことである。金に固執するのは意地汚いなど思っていた。しかしながら、人にサービスをすることで支払われる報酬は自分の存在価値にもつながり、それを追求することはサービスを追及することだと感じるようになった。そして、金は人が生活していく上で必要なものであり、社会で生きていく以上、ビジネスは金儲けである必要があると考えるようになった。それは理想自己を現実状況に近づけたといえる。つまり、現実状況は理想自己に優先することがわかる。

(7) 現実自己と現実状況のギャップ

調査内容 の就職活動期の現実自己と現実状況のギャップは、自分という人間と企業が求める人物像の違いである。最初は面接で何故落とされるのかわからなかった。それで、面接で落とされた企業に行き、話をきかせてもらったときに話し方の問題と言われた。しかし、それがわかるまでは企業が求める人物像というものを自分なりに考え、それに合そうとしていた。また、自分の話し方が悪いということがわかったあとも、その欠点を直そうとした。つまり、現実状況が現実自己に優先していたことがわかる。

(8) 理想自己に影響を与えたその他の要因

調査内容 の就職活動期に理想自己を実現するにあたり影響を与えたものは先輩と友人である。先輩や友人に自分の長所や欠点を聞くことにより、自分というものを明確化していった。つまり、他者からのフィードバックにより現実自己の吟味がより行われたといえる。また、他者に自分の理想自己を話すことにより、理想自己も明確化していったといえる。

(9) モデル化

以上のことをモデル化すると図8のようになる。

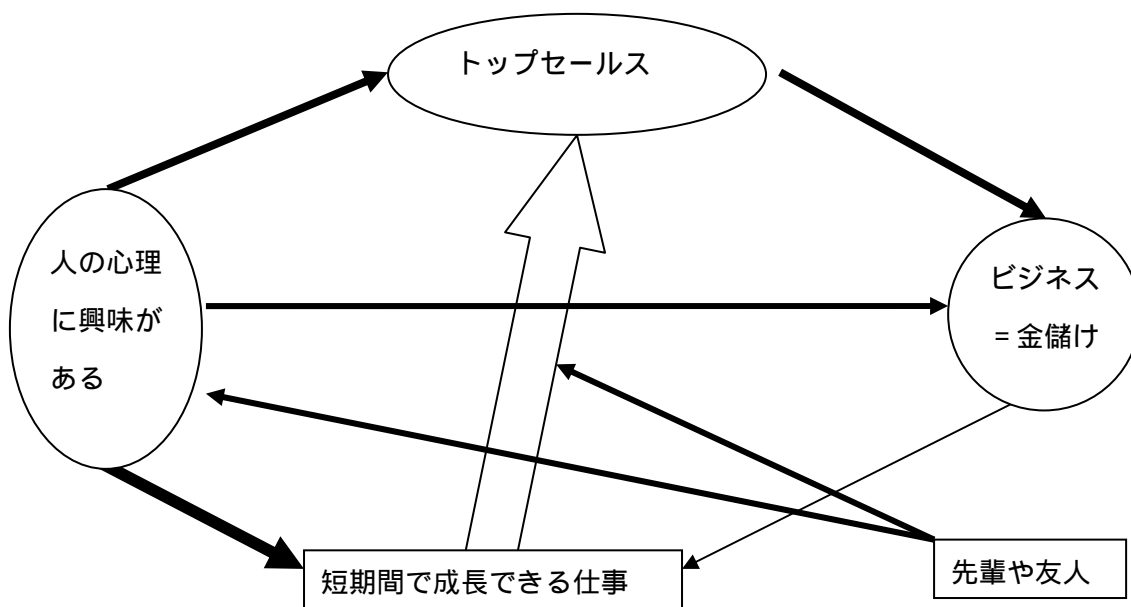


図8 selfのキャリアデザイン構築プロセスモデル

就職活動初期の私の仕事における理想自己は短期で成長できる仕事で、(2)、(3)からわかるように、現実状況は知識のみで、理想自己は主に人に対して興味があるという現実自己の影響をより受けていることがわかるから、理想自己は現実自己に近づいている。現実自己の大きさは(2)で見たように、努力家で人に興味があるといったように自己分析を通して吟味されているために大きいので、現実自己は大きく描かれている。現実状況は(3)で見たようにただ会社が求める人物像などの情報という具合で吟味という程のものでもない。小さく描かれている。現実自己と理想自己間を説明すると、前述の通り、現実自己の影響を大きく受けているので矢印は太い。また、(5)で見たように、理想自己を達成するために人見知りや直そうと努力していることから、理想自己が現実自己に優先するので、矢印は理想自己に向かっている。現実状況と理想自己間を説明すると、(6)で見たようにビジネスというものがビジネスは人ありきだという理想と違っていただけであるが、それは大して理想自己に影響は与えていないので矢印は細く、理想自己に現実状況を合わそうとしていることから、理想自己は現実状況に優先することがわかるので、矢印は理想自己に向かっている。それは相対的に見て、現実自己より理想自己に影響を与えている。また、(6)で見たように、理想自己が現実状況に優先することから矢印は理想自己に向かっている。現実自己と現実状況間の関係について説明すると、(7)で見たように、どうにか内定をもらいたいという気持ちから、どうやれば内定をもらえるかを考えて欠点を直していたので、矢印は細くもなく太くもない太さで、現実状況が現実自己に優先している。矢印は現実状況に向かっている。

現在の私の理想自己は(4)で見たようにトップセールスになることであり、それは雇われている側としての求めているものと、そうなることで多くの人と交流できることができることなので、現実自己と現実状況の真ん中にある。現実自己と理想自己間を説明すると、現在のトップセールスになりたいという理想自己は現実状況の影響が強くなったためである。現実自己の影響の強さは変わってはいないが、相対的に見たとき、影響力が弱まったと言えるので、矢印は少し細くなり、(5)でみたように、どんな人とも話ができるように努力していることから、理想自己が現実自己に優先するので、矢印は理想自己に向かっている。現実状況と理想自己間について説明すると、(6)で見たように、仕事をする以上サービスの提供は不可欠であるので、そのために、仕事のスキルを上げるために内定先の会社でアルバイトとして働いていることから現実状況が理想自己に優先することがわかるので、矢印は現実状況に向かっている。相対的に見ると影響力が強まっているので、矢

印は太くなる。

理想自己に与える現実自己と現実状況以外の要因としては、(8) で見たように先輩と友人が挙げられる。彼らからのフィードバックにより現実自己の修正、理想自己の修正が行われたので、矢印は現実自己と理想自己構築のプロセスに向かっている。

4 全体の結果と考察

4.1 現実自己と現実状況の相互作用による理想自己の推移

この研究により、現実自己はそれ自体で吟味されうるものではなく、他者や現実状況を通して吟味されるものだということがわかった。そして現実状況を吟味することにより、現実自己を現実状況に近づけようとするのがわかった。つまり、就職活動は現実自己を現実状況に近づけるように作用するものだということがわかる。そのため、理想自己はより現実状況に近づいた形で描かれるようになる。だが、一度現実状況に近づいた理想自己は仕事に慣れることによって現実自己に近づくこともこの研究によって明らかになった。このように、現実自己と現実状況との統合で理想自己は描かれるものであるが、4年という短いスパンの中であっても、その現実自己と現実状況の優先順位は現実自己から現実状況へ、現実状況から現実自己へとめまぐるしく動いているということがわかった。そしてその都度、理想自己は再編されていくものであることがわかった。

段階的に述べると、現実状況の吟味の乏しい就職活動初期には、現実自己の吟味も出来ていない。そして、その曖昧な現実自己の影響を受けて理想自己を描いているために、理想自己は現実味のない突飛なものであることが明らかになった。それは以下のような話からわかる。

仕事に何を求めるか違って、ま、一千万二千万、一億とか、全然いらんし。ま、安いのは困りますけど。別に高くなくてもいいんで、やっててやりがいのある仕事したいです。(Aくん)

とにかく一番が金儲けをしたい。(Dくん)

これは、現実状況がしっかり吟味されていない結果であり、そしてそれは、就職活動初

期ということで、まだ現実状況が影響力をもっていないことに起因するものである。ここから、現実状況が吟味されないと理想自己は曖昧であることがわかる。

次に、就職活動終了後について述べる。就職活動が終わってすぐは、就職活動中の会社説明会、OB訪問、面接などにより、現実状況が吟味される。そしてそれに伴って現実自己は現実状況に近づいている(大学4年生の3人中2人、Dくん・self)。また、現実状況の吟味が行われることにより、現実自己は明確化してきているといえる。そのため、理想自己がより具体的に、現実味を帯びたものになる。しかし、この時点では実質的な現実状況が吟味されないために、まだ現実自己の方を優先していることが多い。それは以下のような話からいえる。

もちろん社会には適応しなければいけないけど、ま、その前に自分ありきなんで。(Cくん)

給料に関して言えば、証券会社って、能力主義みたいなのがあるから、だから、自分ができた分だけ、自分の給料が上がっていくわけだから、多分。そういう意味では自分にいいんじゃないかって思うし、だけど、あの、なんだろう、ま、土日休みってのがあるけど、自分的には頑張る期間みたいなので、3日間おもっくそ仕事して、そのあと休みとかにしたいなああって思ってる。やった仕事に見合うだけの仕事が欲しい。そういうふうな気ままな仕事がしたい。やるときやって、休むときは多めに休むみたいな。(Dくん)

これから、就職活動が終わったとしても、まだ現実自己と現実状況の統合は出来ていないということがわかる。そして、就職活動が終わった時点では、就職活動初期に比べると理想自己は現実状況に近づいてはいるが、まだ現実自己が現実状況に優先される傾向があることがわかる。

そして、仕事を始めることにより現実状況は実質的な影響力を持つようになると、現実自己は現実状況の中で測られるものになり、現実自己は現実状況に近づけざるをえない状況になる。そして、理想自己はさらに具体的になる。それは以下のような話からわかる。

できなかったらその時点でおわりだから、(...中略...)別の部署に飛ばされるってと

ころやからな．がんばるしかないみたいな．(Eさん)

とにかくやっぱ，会社に貢献できるだけの利益を稼ぐことやな．で，自分が売って
る商品を，やっぱり，みたら，うれしいやろなあ．それで，社会に貢献できているの
を少しでも感じられたら，それはほんとに，幸せだし，やりがいあるし．(Eさん)

ここから，仕事を始めると現実状況が現実自己に優先することがわかる．そして実際に
働くことを通してこうなりたいという理想像が具体化している．つまり，ここからも現実
状況の吟味によって，理想自己が明確化するといえる．

次に，仕事に慣れてくると今度は現実自己の理想自己に与える影響力が強くなる．それ
は以下の話からわかる．

これだけできますっていうのを僕がもってて，会社にその3分の1とか2分の
1とかしか期待されてなかったり，あたえられなかったら，多分会社にいないと思う．
(Fさん)

自分にとっての仕事のやりがいが明確化したときに，自分が満足できるやりがいが仕事
に見出せなかったときに，自発的に会社を辞めるといえることがわかる．ここから，理想自
己のあり方は社会状況と共に変化しているといえる．終身雇用がなくなった今日，理想自
己は企業内に留まらず，フィールドは社会全体であるといえる．

以上を簡潔に述べると，就職活動により現実状況が吟味されるまでは，理想自己は現実
自己，もしくはその他の要因によってのみ形成されるが，就職活動中，そして仕事を始め
てからは現実状況が吟味され，実質的な影響力を持つようになるにつれ，現実状況が最も
影響力をもつようになる．その現実状況の範囲内で現実自己がより吟味され，理想自己が
実現可能な具体性を持った実現可能なものになることがわかった．

以上の理想自己の変化を，それぞれの時期に多数派を占める理想自己を一般的な理想自
己として理想自己の変化を図9のように図示した．なお，この図における→はすべて理
想自己に与える影響力とする．

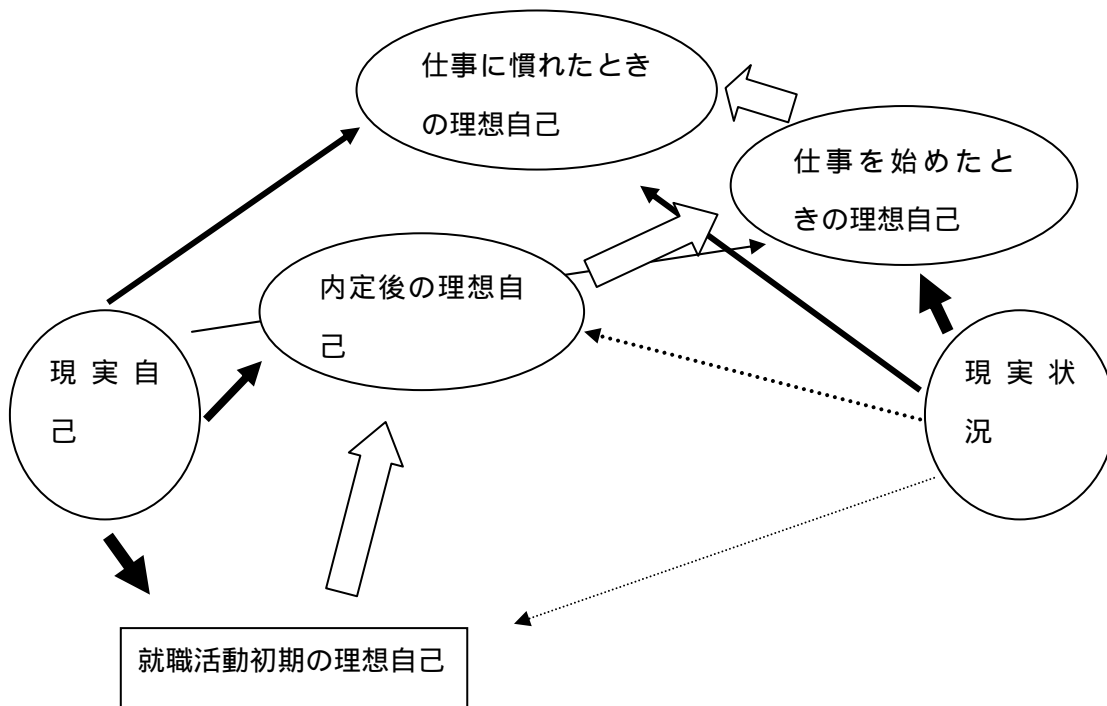


図9 理想自己の推移

4.2 理想自己の変化の要因

理想自己が段階的に変化していくことは明らかになった。次に変化する要因について考察する。これも段階的に述べていくことにする。

まず、就職活動初期から内定後の理想自己に変化する時の要因について考察する。就職活動初期と内定後の理想自己を比較すると、現実自己の影響の方が強いが、現実状況に近づけようとしている姿勢が伺える。この現実状況に近づけようとしている要因は次の話からわかる。

もしかしたら、そのさき、自分が何がしかこういうことで、建築とか、その他、建築に関わる裾野でやっていく上では、やはり、今よりも更に、やりにくいところは、ってか、難しいところはでてくるかもしれない。そういうのをちょっと認識はしてきてるね。(Cくん)

課題っていうのもぎりぎりにならないとやんない。やりださないっていうのもあるし、これ働いていったら絶対しばかれるだろうなあって思ってるから、だから最近は

ちょっとずつでも、課題をこなしていこうとは思ってる。(Dくん)

これらから、理想自己が変化する要因は仕事をやる上での障害になるだろうという推測であることがわかった。現実自己だけを考えていても理想自己は実現できないということで、現実状況を受け入れることは妥協であることが伺える。

次に内定後から仕事を始めてからの理想自己の変化について考察する。仕事を始めてからの理想自己は相対的に見ると、現実自己よりも大きく現実状況の影響を受けていることがわかる。その要因は次のような話からわかる。

9月、10月くらいまではもう、もうなんて言うのかなあ、あんまり努力をしてないってまわりの人に見られてたつてのもあるし、あんまり仕事まわしてもらえなかったりとか。(Eさん)

つまり、現実状況を優先しなければ、理想自己を実現することはできないということが要因にあるということがわかる。そして、現実状況に現実自己を合せなければいけないという強い強迫観念により、理想自己は現実状況の中でのみ実現しうるものだと感じていることがわかる。

そして、仕事を始めてから慣れるまでの理想自己の変化の要因について考察する。仕事を始めたころは強迫観念により現実状況が大きな影響力を持ち、理想自己は本当に具体化されていたが、仕事に慣れることにより、現実自己の影響を大きく受け始め、理想自己は少し抽象的になった印象を受けた。その要因は次のような話からわかる。

催事でそこそこ実績を残したからね、(...中略...)どう認めさせるかだと思うよ。(Fさん)

成績を上げるのはそうなんだけど、選択肢を増やしていきたい。この会社にいるという点でいうても、こいつはこういうこともできそうやからいっぺんやらしてみようかみたいなんもあるし、会社外においても、ちょっとうちひばってこよかみたいな。だから、会社に依存しなくてもやっていけるようになりたいなあとは思うけどね。(Fさん)

仕事くらいしか認められるところがないから。(Fさん)

これらから、仕事は人に承認されるためのツールだということがわかった。結果を残せば、また次の大きな結果を残して、それを繰り返すことで人に認められたいという欲求がより強くなり、理想自己は現実自己の影響を強く受けるようになることがわかる。

以上のように、仕事に慣れるまでは強迫観念が現実自己の理想自己に与える影響を減少させ、現実状況の理想自己に与える影響を増大させるといえる。そして、自信がつくことにより強迫観念は弱くなり、現実自己の理想自己に与える影響が再び強まるといえる。つまり、現実状況の吟味は強迫観念につながり、その強迫観念によって理想自己に与える現実自己の影響力が弱くなるということが明らかになった。

4.3 大卒離職率3年3割との因果関係

この研究では残念ながら就職活動におけるキャリアデザインと大卒離職率3年3割の問題との因果関係は実証することができなかった。しかしながら、仕事に慣れるまでは仕事をしなくてはいけないという強迫観念、仕事ができなくてはいけないという強迫観念から現実自己がないがしろにされるキャリアデザインが一般的であることがわかった。これは、実力主義への過渡期である今日において、一層強いものであるのではないだろうか。現実自己を失わないために、つまりは自己の尊厳を守るために新卒者は3年以内で辞めてしまうのではないだろうか。

おわりに

この論文をまとめるにあたり、多くの方々に協力を頂きました。就職活動、卒論、仕事と本当にお忙しい中インタビューに協力して下さった皆様に大変感謝申し上げます。

また、論文執筆にあたり多大なアドバイスを頂いた立木茂雄先生、TAの黒宮亜希子さん、そして、調査にあたりお世話になりました吉本さんに心より感謝致します。

[注]

¹⁾ この研究において、現実自己は、基本的な能力、気質、性格、価値観、姿勢、態度、興

味，志向，基本的スキル，専門知識，専門スキルを指す．

- 2) この研究において，現実状況は，社会，雇用形態，業界，職種，仕事の中身，仕事に必要な資格/スキル，求人倍率，相場情報，会社の立地，業界内のポジション，給与体系，人事制度，企業風土，職場の雰囲気，人間関係，ポジションの権限を指す．

[文献]

安部正浩，2005年『日本経済の環境変化と労働市場』東洋経済新報社．

足立明久，1988年「進路指導における自己実現の過程と構造：メタ認知的考察」『進路指導研究』(9) 19-27

古野庸一，1999年「キャリアデザインの「必要性」と「難しさ」」『キャリアデザイン支援に向けた「キャリアモデル」の研究』4-7

岡村亮・玉野なつ美・山中晴穂・三嶋なな子，1998年「大学生の就職活動が個人の成長を促す実証的研究 自己受容度，社会的コンピテンス能力とEASQの視点から

」

笹島芳雄，2002年『現代の労働問題』中央経済社．

Super, D.E., 1957, *The psychology of careers*, : Harper & Brothers. (=1960, 日本 職業指導学会訳『職業生活の心理学』誠信書房.)

高村和代，1995年「アイデンティティ形成プロセスについての事例的検討：大学4年生の就職活動課題に着目して」『日本教育心理学会総会発表論文集』(37) 472

梅村祐子・金村篤子，2004年「就職活動における理想と現実の統合過程に関する探索的研究」『経営行動科学学会年次大会：発表論文集』(7): 168-173

1 ページあたり 1200 字 (40 字 × 30 行)

総ページ数 53 枚 (原稿用紙 159 枚)